

平成29年度上越教育大学

いじめ等

予防対策

支援

プロジェクト  
事業成果報告書

## コンテンツ

---

BPプロジェクト

---

上越教育大学いじめ等予防対策支援プロジェクト

---

いじめ等予防対策支援プロジェクトフォーラム実施報告

---

研究等成果報告

---

WEBページ紹介

---

## 目 次

第Ⅰ章 いじめ防止支援プロジェクト（BPプロジェクト）	1
平成29年度BPプロジェクト（いじめ防止支援プロジェクト）実施要項	
第Ⅱ章 上越教育大学いじめ等予防対策支援プロジェクト	5
1 上越教育大学いじめ等予防対策支援プロジェクトについて	
2 平成29年度BPプロジェクト事業実施計画	
第Ⅲ章 いじめ等予防対策支援プロジェクト研修会実施報告	8
1 研修会プログラム	
2 公開授業報告	
(i) 学部授業科目「初等特別活動論」	
(ii) 大学院授業科目「いじめ等先端課題研究特論」	
3 研究協議会	
第Ⅳ章 研究等成果報告	27
1 友達関係についてのアンケートとシンポジウム	
2 いじめの報告書について考える	
3 小・中・高等学校時代の座席決めに関する研究	
4 保護者との信頼関係を構築するための「出前講座」の実施	
第Ⅴ章 その他本事業における平成29年度の実組	34
新潟市いじめ防止市民フォーラムに参加して、平成29年度「深めよう 絆 県民の集い」（上越地区）	
第Ⅵ章 WEBページ紹介	36
上越教育大学いじめ等予防対策支援プロジェクト専用WEBページ	

## 第I章 いじめ防止支援プロジェクト（BPプロジェクト）

### 平成29年度BPプロジェクト（いじめ防止支援プロジェクト）実施要項

平成29年6月2日

#### 1. 趣 旨

我が国のいじめ問題の根本的な克服に寄与するため、平成27年度に4教育大学の協働参加でスタートした「いじめ防止支援プロジェクト（BPプロジェクト（※）」は、各機関や地域の教育委員会の協力を得て、教育委員会担当者及び学校教員等を対象に講演や研修会、シンポジウムなどを行ってきた。

平成29年度は、「いじめ防止支援機構（BP-CORE）」を更に機能強化して、現代事情に即した対策の強化や、新たなネットワークによる連携協力を充実し、全国的な取組を支援するほか、事業実績・成果を学士課程や大学院課程のいじめ防止に係る授業及び教育免許状更新講習等に活用し、いじめ問題に適切に対応していきける教員養成にさらに力を入れるだけでなく、その専門的な知識と情報を駆使して、現在、教育委員会や学校が行っている教員研修や教育活動等にも、これまでより一歩進んだ支援を行う。

本プロジェクトは事業終了年度までに順次、成果や具体的な研修コンテンツ等を全国に発信・普及し、学校現場で深刻な課題となり続けているいじめの防止に向けた地域に根差した教員養成・研修の充実と支援を全国に拡大する。※BP（Bullying Prevention：いじめ防止）

#### 2. 構成大学

宮城教育大学

上越教育大学

鳴門教育大学（世話機関 事務局：いじめ防止支援機構（BP-CORE））

福岡教育大学

#### 3. 協力団体

国立教育政策研究所

日本生徒指導学会

公益社団法人日本PTA全国協議会

各地の教育委員会等

#### 4. 事 業

プロジェクトは、個々の大学の特色を生かし、次のような事業を連携・協力して行う。

##### （1）支援事業

- ① 教育委員会のいじめ防止対策支援（法に基づいた教育委員会会議への参画等）
- ② 教育委員会の研修支援（講師の派遣、研修内容のアドバイス等）
- ③ 学校へのいじめ予防に関する教育支援（予防に効果的な授業等の紹介）
- ④ 重大事態など個別ケース相談支援
- ⑤ 子供の自己信頼心や社会性向上教育支援（いじめの背景にある現代的な子供の特性に対応した効果的な教育の紹介）

##### （2）教育・研究事業

- ① いじめ問題に強い教員養成システム開発（大学・大学院の授業改善）

- ② いじめ関係研修プログラム開発（教育委員会等が行う効果的な教員研修プログラムのコンテンツを収集し、提供する。）
- ③ いじめ予防・対処・研修関連情報をWebで全国に発信（学校が行う効果的な予防的教育の事例、事件が発生した際の教育や対処の事例等を収集し、Web等で広く提供する。）
- ④ シンポジウムの開催（教育研究の成果は、下記（3）の研修内容も含め、シンポジウムを年1回開催し共有する。）
- ⑤ 本プロジェクトを実施する4構成大学関係者を中心に、いじめ問題に関わる教育・研究従事者を集めた勉強会を年1回以上開催する。

### （3）研修事業

- ① 教育委員会研修担当者・教員等への研修（いじめ問題関係の教育委員会研修担当者や学校教員等を対象とした研修会）を全国4か所（宮城、新潟、徳島、福岡）を起点として開催予定。

## 5. 実施組織

本プロジェクトの実施に当たっては、次の会議を開催する。会議には協力団体に同席を依頼することがある。また、必要に応じて、インターネット回線を利用したweb会議を開催する。

### （1）学長会議

- ・本事業の実施要項等，重要事項について決定，合意等を行う。

### （2）代表者会議

- ・本事業の実施計画の立案を行う。
- ・本事業の費用配分について協議を行い決定する。

各大学の担当理事，局長，部課長及びセンター長等  
議長：鳴門教育大学いじめ防止支援機構長

### （3）協議会

- ・本事業の個別事業について企画・立案及び実施を行う。
- ・必要に応じて専門部会を置くことができる。

各大学の企画担当代表教職員2～3名  
議長：開催大学

### （4）勉強会

- ・4構成大学の研究者による情報交換・ディスカッションを行う。

各大学の研究者・担当者等  
議長：開催大学

## 6. スケジュール

平成29年6月 第1回学長会議・代表者会議・協議会（web会議）

～12月 各大学で教育委員会研修担当者・教員等を対象とした研修会等を実施，必要に応じて学長会議，代表者会議，協議会及び勉強会を開催

平成30年2月 シンポジウム（東京）

学長会議・代表者会議・協議会・勉強会セット開催

3月 印刷物「事業まとめ（仮称）」作成

## 7. 予算

- ・平成29年度文部科学省機能強化経費（鳴門教育大学からの配分経費）
- ・各大学において本プロジェクト用として設けた年度予算

## 8. 事務

本事業の主たる事務は、鳴門教育大学いじめ防止支援機構（BP-CORE）が行う。

なお、各地区で行われる研修会等の事務については、各大学が行う。

### 参 考

いじめ防止対策推進法（抄）

（基本理念）

第3条 いじめの防止等のための対策は、いじめが全ての児童等に関係する問題であることに鑑み、児童等が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、学校の内外を問わずいじめが行われなくなるようにすることを旨として行われなければならない。

2 いじめの防止等のための対策は、全ての児童等がいじめを行わず、及び他の児童等 に対して行われるいじめを認識しながらこれを放置することがないようにするため、いじめが児童等の心身に及ぼす影響その他のいじめの問題に関する児童等の理解を深めることを旨として行われなければならない。

3 いじめの防止等のための対策は、いじめを受けた児童等の生命及び心身を保護することが特に重要であることを認識しつつ、国、地方公共団体、学校、地域住民、家庭その他の関係者の連携の下、いじめの問題を克服することを目指して行われなければならない。

（いじめの防止等のための対策に従事する人材の確保及び資質の向上）

第18条 国及び地方公共団体は、いじめを受けた児童等又はその保護者に対する支援、いじめを行った児童等に対する指導又はその保護者に対する助言その他のいじめの防止等のための対策が専門的知識に基づき適切に行われるよう、教員の養成及び研修の充実を通じた教員の資質の向上、生徒指導に係る体制等の充実のための教諭、養護教諭その他の教員の配置、心理、福祉等に関する専門的知識を有する者であっていじめの防止を含む教育相談に応じるものの確保、いじめへの対処に関し助言を行うために学校の求めに応じて派遣される者の確保等必要な措置を講ずるものとする。

2 学校の設置者及びその設置する学校は、当該学校の教職員に対し、いじめの防止等のための対策に関する研修の実施その他のいじめの防止等のための対策に関する資質の向上に必要な措置を計画的に行わなければならない。

# BPプロジェクト(いじめ防止支援プロジェクト)

平成27年度特別経費  
プロジェクト分  
予定額 16,761千円

いじめ問題に関して特色ある取組を行っている4大学(宮城教育大学, 上越教育大学, 鳴門教育大学, 福岡教育大学)は、文部科学省の特別プロジェクトとして協働参加型のネットワークによる「BPプロジェクト※(いじめ防止支援プロジェクト)」を立ち上げ、関係機関・組織の協力を得て、教育委員会や学校の教育力向上のための、各種支援事業、教育研究事業、研修事業等を実施します。

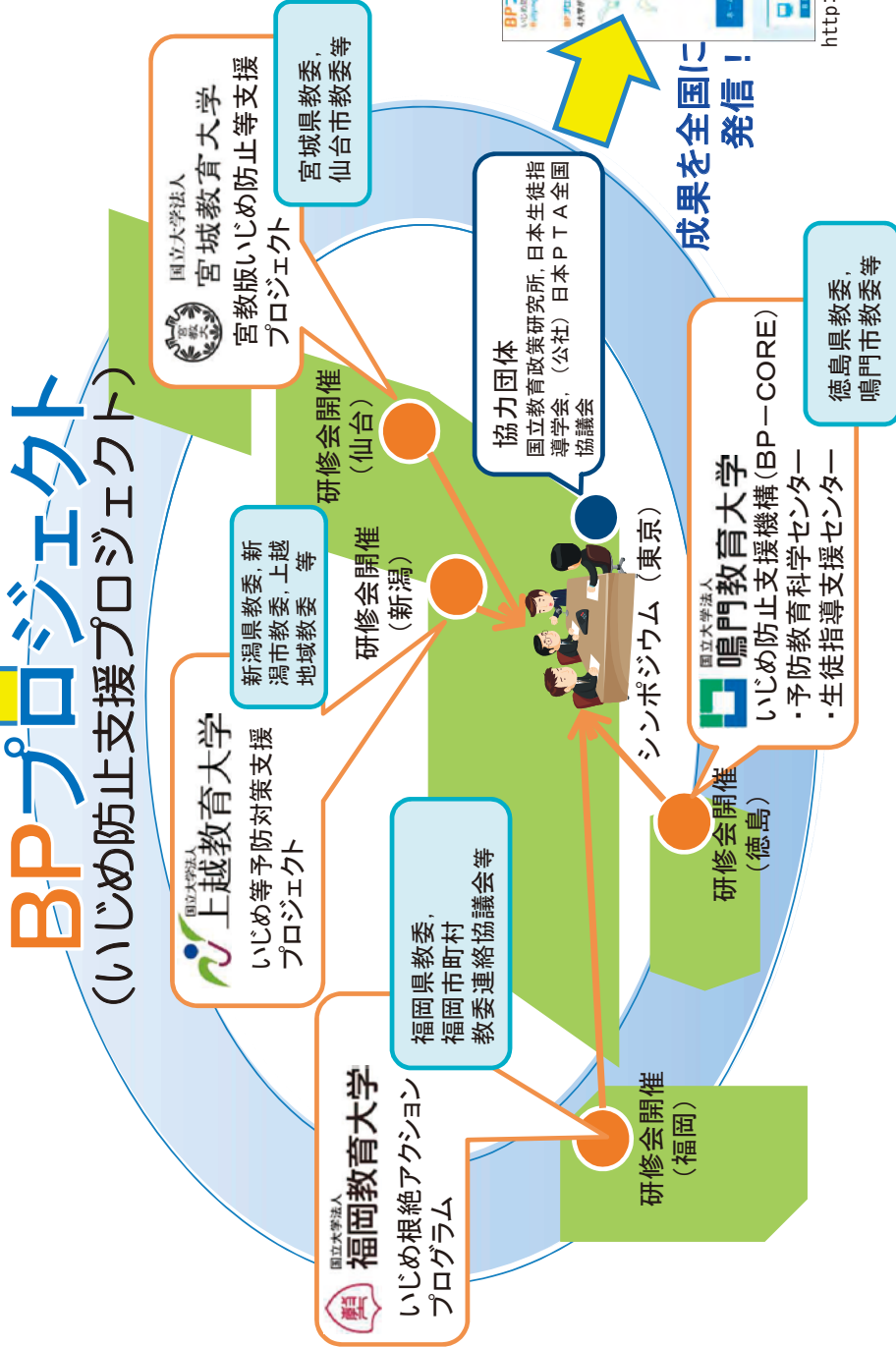


## BPプロジェクト (いじめ防止支援プロジェクト)

※BP (Bullying Prevention : いじめ防止)

### <主な事業> \*4大学協働or主幹大学

1. 教育・研究事業
  - ①いじめ予防教育の開発と普及
  - ②教員研修プログラム開発(教委用)
  - ③特別支援教育といじめに関する研究
  - ④スクールカウンセラーの活用と育成
  - ⑤いじめに関する事例等の分析
  - ⑥いじめに強い教員養成システム開発
2. 支援事業
  - 教育委員会・学校への各種支援 (全国4か所)
3. 研修事業
  - 教育委員会研修担当者向け研修会
4. 情報提供
  - ①いじめ防止情報をWebで全国に発信
  - ②成果報告会・シンポジウムの開催



<http://www.naruto-u.ac.jp/research/bpproject/>

### 1 上越教育大学いじめ等予防対策支援プロジェクトについて

上越教育大学副学長 林 泰成

#### 1. プロジェクトの概要

平成29年に文部科学省より公表された、平成28年度の全国の小中学校と高校と特別支援学校で把握されたいじめの認知件数は、32万3808件である。これは、前年度よりも9万8676件の増加であり、約44%増えたことになる。増加したとはいえ、文科省が、ささいなことにも注目して早期発見に努めるように促した結果であると考えられるので、悪いことではない。しかし、相変わらず、いじめと目されるような問題行動が続いていることには変わりない。いじめに対する対応は、今も学校現場で喫緊の課題となっているのであり、教員養成を主たる業務とする本学でも重要な教育課題であると認識している。そうした中で、4大学が、国立教育政策研究所や日本生徒指導学会と協力しながら（現在では、公益社団法人日本PTA全国協議会とも協力しながら）、いじめ予防に取り組むBPプロジェクトを平成29年度も実施した。

上越教育大学で取り組んでいるBPプロジェクトは「いじめ等予防対策支援プロジェクト」という名称である。本学ではこのテーマのもとに、4つのサブテーマを設定しており、平成29年度についても、この4つに取り組んできた。

1つめは、「教員研修プログラムの開発」である。

平成29年度は、プロジェクトメンバーの高橋知己が、教員免許状更新講習の選択必修領域において「いじめ・子どもの危機について考える」と題する講習を、新潟県内3か所（上越市、長岡市、佐渡市）において開設した。他にも、道徳教育や教育相談などに関する講習でも、内容としてはいじめ予防に言及している講習がある。また、メンバーが依頼された生徒指導、教育相談、特別活動、道徳教育、キャリア教育等に関する研修会・講演会においても、いじめ対策、いじめ予防に関する事項に言及した。

2つめは、「大学授業のカリキュラム開発」である。

平成28年度より道徳・生徒指導コースにおいて開設している「いじめ等先端課題研究特論」を、学生からのコメントに基づいて内容を修正したうえで29年度も開講した。現在、平成31年度からの大学改革にともなって、この科目を教職大学院の共通科目として開設できないか検討している。

3つめは、「社会貢献としての研究成果の公開」である。

平成29年度は、大学および大学院でのいじめを扱っている授業を、プロジェクトに参加する4大学の先生方に見ていただき、協議会を実施するという形式をとった。加えて、「深めよう 絆 にいがた県民会議」（新潟県教育庁義務教育課内）が主催する「深めよう 絆 県民の集い（上越地区）」において、プロジェクトメンバーの稲垣応顕が「いじめに対する中・高校生の本音トーク」のコーディネーターを務めた。新潟市の取組では、新潟市いじめ防止市民フォーラムにおいて高橋知己が講演を行った。

4つめは、「研究と実践からなる小冊子（成果報告書を兼ねる）の発行」であり、各年度においては事業成果報告書を発行しており、本年度も発行する。

## 2. 実施体制

本学のBPプロジェクトは、カリキュラム開発がプロジェクトの大きな柱の1つになっているので、学内の「カリキュラム企画運営会議」のもとに、「いじめ等予防対策支援プロジェクト実施専門部会」を設置し、そのメンバーを中心に、本事業に取り組んでいる。その専門部会のメンバーは以下のとおりである。

氏名	職名・所属等	専門
林 泰成	副学長・大学院学校教育研究科教授 カリキュラム企画運営会議議長	道徳教育，心の教育
安藤 知子	大学院学校教育研究科 教授 学校教育専攻 教育連携コース	学校経営学（学校組織論，学年・学級経営論）
稲垣 応顕	大学院学校教育研究科 教授 学校教育専攻 道徳・生徒指導コース	臨床教育学（生徒指導，教育カウンセリング）
早川 裕隆	大学院学校教育研究科 教授 教育実践高度化専攻 教育臨床コース・教育経営コース	道徳教育
清水 雅之	学校教育実践教育センター 准教授 教職大学院実習コーディネーター	教科教育学（生活科・総合）
高橋 知己	大学院学校教育研究科 准教授 学校教育専攻 道徳・生徒指導コース	臨床教育学（特別活動論，学校心理学）
留目 宏美	大学院学校教育研究科 准教授 教科・領域専攻 生活・健康系教育実践コース	養護学，養護教諭教育，学校組織論
山田 智之	大学院学校教育研究科 准教授 学校教育専攻 道徳・生徒指導コース	臨床教育学（生徒指導，キャリア教育学）

各メンバーは、それぞれの専門とかかわる形で、学校現場とも密接に連携しながら、いじめ問題の予防とその対処法に関する実践研究に取り組んでいる。メンバーのうちの半数以上が、小中学校または高等学校での教諭経験があり、また2名の者がスクールカウンセラーとしての経験を有している。

なお、事業を進めるにあたっては、必要に応じて、その他の領域の専門家の先生方にも協力依頼を行っている。事務は、教育支援課で所掌している。



## 2 平成29年度BPプロジェクト事業実施計画

### BPプロジェクト 平成29年度事業計画

**1 教員研修プログラムの開発**

- ・本年度開設される教員免許更新講習においても、いじめ予防などの研究成果を取り入れる。
- ・平成30年度に、いじめ予防を中心とした教員免許更新講習の開設数を増やすように立案する。
- ・生徒指導研修会等講習会における研修プログラムを開発する。

**2 大学授業のカリキュラム開発**


- ・昨年度の授業を振り返り、本年度の修士課程「いじめ等先端課題特論」の授業を改善する。
- ・平成31年度大学改革に向け、大学院カリキュラム及び学部カリキュラムにおけるいじめ防止等の取扱いを検討する。

**3 社会貢献（としての研究成果のフォーラムの開催）**

- ・BPプロジェクト授業公開を実施する。
- ・新潟市教育フォーラムに参加協力を行う。
- ・新潟県の「いじめ見逃しゼロ県民運動」に協力する。
- ・新潟県の「深めよう 絆 にいがた県民の集い」に参加協力を行う。
- ・教育委員会・学校等からの研修・相談依頼に応じる。
- ・附属学校においていじめ防止授業を実施する。


**4 研究と実践からなる小冊子の発行**

- ・中間成果報告書をまとめる。



## 平成29年度実施計画

月	実施内容等
4月	大学院授業の実施（～7月）。 県教委・市教委等関係機関との連絡調整（～9・10月）。
5月	
6月	BPプロジェクト授業公開。学士課程カリキュラムの検討。 教員研修プログラムの開発。
7月	教員免許状更新講習の実施。
8月	同上
9月	新潟市教育フォーラムへの参加。大学院授業の効果検証。 次年度教員免許状更新講習の検討。
10月	いじめ見逃しゼロ県民運動上越大会 への参加。
11月	
12月	
1～3月	鳴門教育大学主催のシンポジウムへの参加。中間成果報告書の作成。



1 研修会プログラム

上越教育大学  
いじめ等予防対策支援プロジェクト（BPプロジェクト）  
平成29年度研修会

「教員養成大学におけるいじめ  
授業の在り方を考える」  
—授業参観と研究協議会—

平成29年6月22日（木） 9：30～17：00

場所 上越教育大学 事務局棟3F 大会議室 他

○ タイムスケジュール

【参観指定授業講義内容紹介】 10：00～10：15

【参観指定授業】

学部授業科目「初等特別活動論」 10：20～11：50

【11：50～13：00 昼食・休憩 大会議室】

【参観指定授業】

大学院授業科目「いじめ等先端課題研究特論」

13：00～14：30

【研究協議会・勉強会】

14：45～17：00



【BPプロジェクト担当】

上越教育大学 教育支援課学校連携チーム

TEL 025-521-3279

e-mail gakkoren@juen.ac.jp

<http://www.juen.ac.jp/project/bpjuen/>

## 2 公開授業報告

### (i) 学部授業科目「初等特別活動論」

## 「初等特別活動論」における【いじめ】の授業に関する考察

上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 高橋 知己

### はじめに

2017（平成29）年6月22日（木）に、宮城教育大学、上越教育大学、鳴門教育大学、福岡教育大学のBPプロジェクト関係者を招聘して、「初等特別活動論」の授業公開を行った。BPプロジェクトの一環として、学部学生に対する【いじめ】問題に関する授業をどのように展開していったらよいのか、という要請に応えるべく実施された授業である。当該授業は、履修者数約250名、固定机の階段教室で行われている。受講者は、学部2年生及び大学院1年生がほとんどである。こうした環境の中で、授業をどのように展開し、どのような反応が得られたのか、実際の授業場面を振り返ってみたい。

### 1. 授業の概要

授業は、大きく二部で構成されている。前半は、これまでのいじめ事件に関する報道をもとに、いじめ防止に関する「早期発見の重要性」について再確認し、後半は5～6人程度の小グループに分かれてアクティブラーニングを行うという形態をとった。いじめの事案として、長崎、岩手、秋田の事例を抽出し、いじめの認知や早期発見の難しさを理解した後に、「(1) いじめを発見しにくいのはなぜ？ (2) いじめはどうしたら発見できる？」というテーマで、まず個人の考えを整理し、その後グループでの活動に移行した。その際に用いた指示は、以下の通りである。

活動のテーマ	発見編
(1)いじめを発見しにくいのはなぜ？ (2)いじめはどうしたら発見できる？	
<p>&lt;手順&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①まず、自分の考えを合図があるまで書き込みます。できるだけ具体的に自分のアイデアを書きましょう。</li><li>ex:「先生がもっと話しかける」。</li><li>①<b>6人程度</b>でチームを作ります。場所を移動しても構いません。チームの構成は、同性のみを禁じます。判断の偏りを防ぎます。同一サークルのみのメンバー、同一専攻科のみのメンバー、友人関係のみのメンバーも禁じます。同様の理由です。</li><li>② 司会者を決めます。話しを進める力の源となります。「じゃんけんの勝ち」で選出してください。チーム用の記録用紙を司会者は取りに来てください。記録係を決めてもかまいません。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>③司会者は全員の顔が見渡せる位置に移動してください。</li><li>④挨拶をします。</li><li>⑤司会者は話し合いを始めてください。</li><li>⑥みんなから意見を出してもらいます。ペーパーに自由にメモして構いません。そのペーパーは最後に提出してもらいます。</li><li>⑦全員のアイデアが出たところでそれをまとめてください。意見をどんどん交換してください。時間の許す限り。妙案を期待します。</li></ul>

時間配分は、前半25分、後半30分程度である。最後にグループから出た意見を共有するために全体の場で意見を発表させ、授業者が板書しながら整理した。

活動に際しては、グループでの話し合い、全体での意見交換の場、共に非常に熱心であり、集中して授業に参加している様子が見られた。



(注：写真は授業中の風景)

## 2. 授業後の反応から考えるいじめの早期発見

授業後に、2つの設問に対する自由に記述した回答用紙を、調査に協力することを承諾してくれた79名分手に入れることができた。その調査用紙を分析し、学生が学んだいじめの早期発見について検討してみよう。

### 2-1. いじめを発見しにくい理由

本稿では紙幅の都合もあり、「(1) いじめを発見しにくいのはなぜか？」という設問に対する反応を取り上げたい。79名から挙げられたのは、自由記述による複数回答の結果、381項目であった。

これらの項目について、回答を「(1) 子どもの要因」「(2) 教師の要因」「(3) 発見方法の不備」の3つの要因に分け、カテゴリーごとに分類したのが、以下の表1～3及び図1～3である。これをもとにして考察していこう。

#### (1) 子どもの要因

加害者の要因として挙げられた「隠そうとする」が、全体を通して最も多く寄せられた回答であった。これは、実感を伴う意見であり「当然だろう」とうなずける。だが、精緻にみていくと「ばれることを恐れて隠す」ということ、「かげでやっている」ということは近似していると考えられるが、「うそをつく」「一見仲良く見せて教師に気づかれないようにする」など、いろいろな状況が考えられる。ばれることを恐れて隠したり陰でやったりするということは、教師にいじめが発見され、指導が加えられると叱責されることを想定していることがうかがわれる。一方、うそをつく、仲良く見せるということも叱られることを恐れていることの現れであるが、教師に隠れて行ういじめに比べて、教師にうそをつくという大胆さを垣間見ることができる。陰でやるいじめと比較すると、加害者の強さやしたたかさが感じられるより深刻ないじめの状態であるとも考えることもできよう。もう一つの加害者の要因としてカテゴリーにあるのが「加害者のポジション」という要因である。加害者がクラスで上位である、成績がいいので先生にかわいがられている、といった記述例が見られたが、いわゆる「スクールカースト」と呼ばれるヒエラルキー（階層）の存在がいじめを発見しにくくしている、あるいはいじめを引き起こす一因となっているということが考えられる。いじめの形態としてはいくつか考えられるが、階層性に基づく加害者のいわゆる社会的な優位性がいじめの誘因となり、教師と好ましい関係性が取れているものはいじめは発見されにくい、と生徒たちは感じていることがわかる。

#### 援助要請できない子どもたち 『二重の秘匿』

被害者の要因として相談や援助要請ができないことが挙げられている。近年の援助要請研究（永井・本田・新井（2016））では、援助要請は援助を要請することによる利益やコストを検討しながら行われている

表1 いじめを発見しにくい理由—子どもの要因

対象	主な要因	定義	記述例	出現数
加害者の要因	隠そうとする	ばれないようにしている。陰でやっている。仲良しを装う。教師が気づかない。	・いじめの加害者は、ばれないようにいじめを行おうとするから。	70
	加害者のポジション	加害者がクラスで上位の子。先生と仲がいい。	・加害者がクラスで立場的に上であることが多いため。	4
被害者の要因	援助要請できない被害者	相談や援助要請できない。	・いじめられても相談できない。	31
		いじめと認めたくない。被害者が隠す	・いじめられている側もいじめを隠そうとするから。	22
周囲の状況	悪化懸念	仕返しが怖くて言えない。チクったと言われる。悪化する。	・いじめられている生徒も教師に言ったらさらにいじめがひどくなることを恐れて、なかなか報告できないから。	29
	学級の中、周囲の雰囲気	周囲が無関心。見て見ぬふり。おおごとにしたくない。面倒。クラスの雰囲気が悪い。	・周り—言えない（自分もまきこまれるとめんどろ）。 ・おおごとになるのがいや。	44
	次の被害者になるこわさ	次のターゲットになりたくない	・いじめの拡大を恐れる。ターゲットになりたくない。	12
		ターゲットが次々替わる	・いじめの対象が変わることがあると考えているから。	3
発見を難しくする社会的な要因	いじりといじめ	「いじり」なのか「いじめ」なのかわからない。気づけない。軽く考えている。定義があいまい。	・遊びやいじりの延長線上にあることも多いと思うから。	50
	子ども社会の特性	子ども社会の閉鎖性。大人に相談しないという暗黙のルール。	・大人に相談するのは「反則」という概念。	3
	コミュニケーションの希薄さ	子ども同士でコミュニケーションが取れない。	・日常のコミュニケーションを取れる子と取れない子の差が大きい。	3

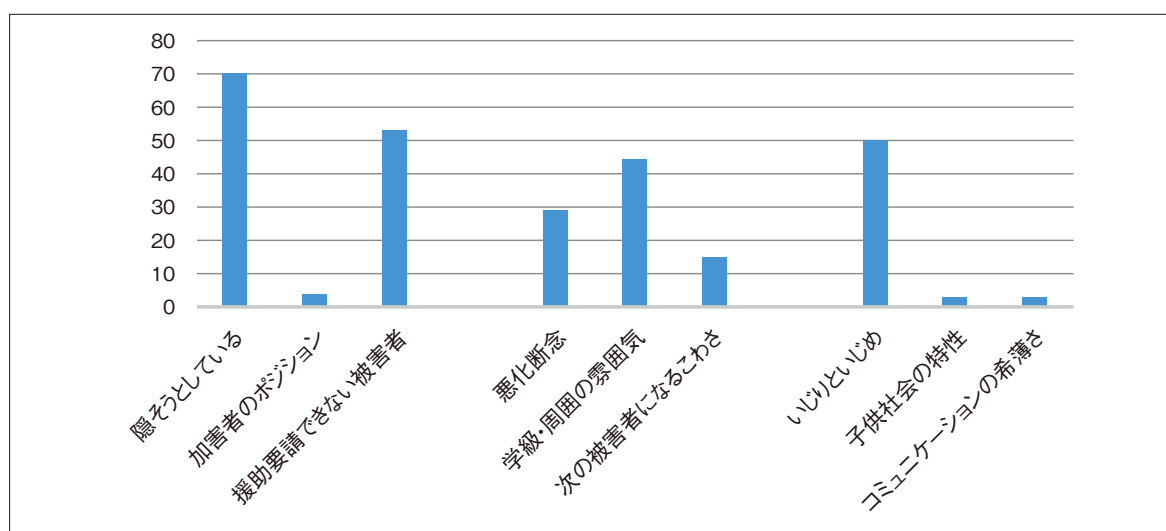


図1 児童・生徒の要因

ことを指摘している。援助要請を行うことで問題が解決するのか、相談した時の秘密は守られるのか、といった点を考慮して誰かに相談しているとしたら、「被害者が相談できない」とする実態は、そうした利益やコストに見合っていないのが被害者を取り巻く現状であると考えられる。誰かに相談することで解決でき

ることが期待できるかということと、相談することでの自らの被る不利益を天秤にかけたときに、援助要請を行うという選択がなされなかったのである。被害者自身がいじめを認めない、隠すという要因も、いじめられているという弱みを他人に見せたくない、他人に相談せずに自分で解決したいという思いも、そうした背景によるものと思われる。

ここまで加害者と被害者の要因を考察してきたが、自らの行為の不当さに気づきながらそれを隠そうとする加害者の姿にも、教師からの叱責を単純に恐れるものと巧妙に応じながら自らへの叱責から逃れようとするものというように、教師に対する態度に差がみられるということがわかった。教師への抗（あらが）い方という「力の差」は、生徒の中で階層を生み、それを利用して上位者が下位者に対していじめという力を行使していじめるために容易に隠ぺいが可能となり、下位者は上位者からの圧力や援助要請することの利益・コストを考えて援助を求めることができずに自分からいじめを隠したり表面化できなかつたりする、といういわば「二重の秘匿」がいじめ問題の発見の困難さにつながっているといえる。

### 学級力の低下

次に、周囲の状況の要因に目を転じてみよう。教師に報告すること、いわゆる「チクリ」は、さらにいじめが悪化することを恐れる、おおごとにしたくない、自分がまきこまれると面倒である、いじめをやめさせようとする学級の雰囲気でないこと、次のいじめのターゲットになるこわさ、などが挙げられている。森田・清永（1986）は、直接的な加害者や被害者以外の周囲のいじめへの関心が薄れていく様子を「観衆」「傍観者」と表現したが、現在はさらにこうした無関心さが拡大し、いじめに対して関心を持つことを忌避する人間が増えてきていると言えるのではないだろうか。観衆が「消極的ないじめ関与」のレベルとすると、傍観者はいじめとは無関係な「不関与」のレベルだった。それが、いじめが拡大することや加害者・被害者が次々とターゲット（対象）を変えながら続くという近年のいじめの状態から、より積極的にいじめという現象からどんどん距離を置き学級集団から離脱しようとする「積極的不関与」のレベルの者が増えてきていることを示唆している。このような現象の背景にあるのは「学級力の低下」とも呼ぶべき、学級の「集団性」という側面が脆弱になってきていることが考えられる。前出の森田らは、傍観者から「仲裁者」を生むことをいじめ防止の手立ての一つとして提案しているが、そもそも学級が集団としてかつてのような機能を果たせているとは言えない今日において、仲裁者はそう容易には出現しないであろう。

### いじりといじめ

加害者・被害者・周囲の状況の要因以外にも発見を難しくする社会的な要因が考えられる。中でも特に多かったのが、「いじりといじめの区別の難しさ」であった。実際に学生や教師に直接意見を聞く機会があったときにも、「どこまでがいじりで、どこからいじめかわからない」「ふざけていると思ったらいじめだった」という声を聴くことが多かった。女子学生から「男子が休み時間などにたたき合ったりしている時は、いじっているのかいじめているのかかわからない」という意見が出たときには、ほとんどが同意していた。実際に遊んでいるのかいじめているのかかわからないという意見が多いように、「いじめの定義」が子どもたちにとっても明確ではないのである。実際、社会性を育むという少年期・青年期においては、他者とのかわりの中で不具合を経験し、それをどのように改善していくか、自分の欲求と他者の欲求が衝突した時のどのように対応していくのかを学びながら人は成長していくものだとしたら、いじめの境界線を当事者以外の外部から引くことは難しい。それは、「大人に相談しないという子ども社会の暗黙のルール」や「コミュニケーションの希薄さ」からも言えることである。

前節で述べたように、いじめの定義は外から決めるべきものではなく、実際の被害を受けている人間の内的な感覚に依るところが大きい。だからこそ、援助要請をどのように引き出すのか、隠ぺいしている行為をどのように引きずり出すのかという、「二重の秘匿」からの脱却がいじめの早期発見には重要な意味を持つといえよう。

(2) 学校・教師の要因

子どもたちの要因の次に、学校や教師の要因について考えてみたい。

表2 いじめを発見しにくい理由—学校・教師の要因

対象	主な要因	定義	記述例	出現数
学校・教師	教師や大人と生徒の信頼関係	教師と生徒の信頼関係がない。大人に相談してもどうにもならない。面倒くさがって対応してくれない。	生徒と教師の信頼関係がない。先生の声がどこまで本気かわかりにくい。	16
	教師の多忙	教師と接する時間が少ない。教師に余裕がない。	先生が忙しくて取り合う時間がない。ゆっくり話を聞けない。	8
	学校の隠ぺい	学校がいじめを認めない。隠ぺい。	学校側の意識が低い。学校の立場上起こってほしくないため。	9
	教師間の情報共有の不十分さ、温度差	教師の温度差。情報共有していない。協働して対処しない。	教師同士で情報共有不足。教員のいじめに対する認識の違い。	11
担任	担任が抱える	担任が一人で抱えて表ざたにならない。	担任の先生が一人で解決しようとして、他言しないから。	4
	担任が問題視しない	担任が問題視しない。いいクラス。気づかない。気づけない。気づかないふり。	担任が見て見ぬふり。いじめがあったとなると（担任の）印象が悪くなるから。	27

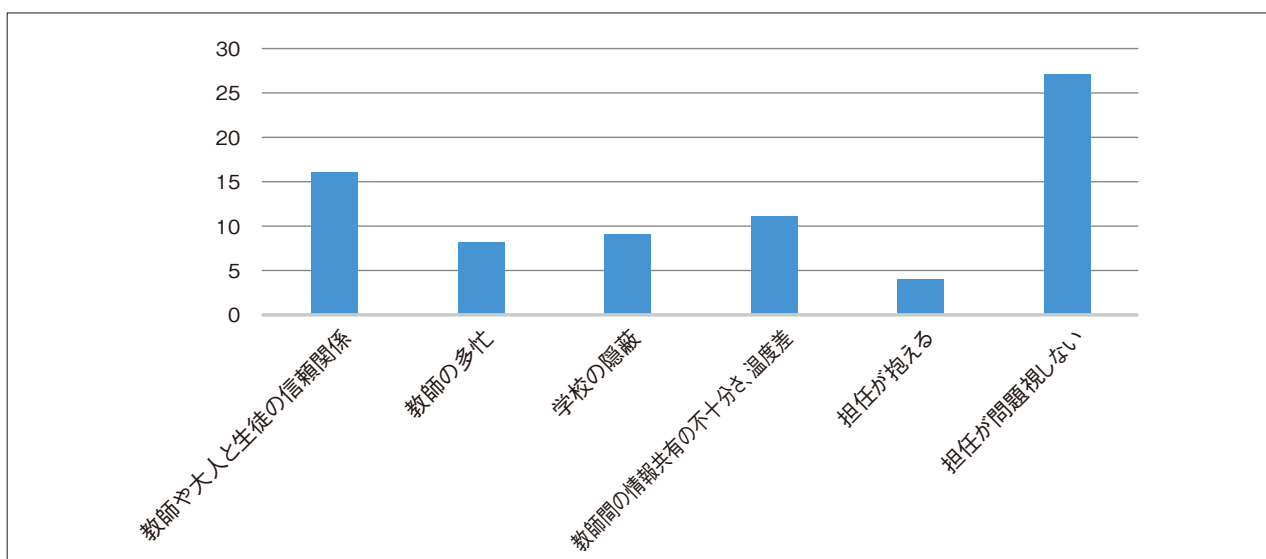


図2 学校，教師，担任の要因

教師への信頼

学校や教師の要因として挙げられた4つの要因を貫くキーワードがある。それは「信頼」である。「教師と生徒の信頼関係がない」という言葉が端的に物語っているが、「先生が忙しくて取り合ってくれる時間がない」というのも信頼を失わせる要因の一つである。そもそも何のための職務なのかと考えたときに、多忙を理由に生徒と向き合えない、生徒と接する時間が少ないということは本末転倒であろう。学校がいじめを認めないということがあったとすればさらに信頼を失墜することにつながるであろうし、それは教師の温度差や情報共有が基底になっている。教師によっては真剣にいじめに向き合っている人もいれば、そうではない人もいる。仮にいじめが発生したとすれば、生徒について情報を収集しようという教師もいれば自分は関係なしとする教師もいるだろう。重要なのは、そうした教師間の温度差を子どもたちが見ているということ

である。一体となっていじめに対する取組を学校や教師が行っているのか、と注視しているのである。いじめに真摯に向き合おうとする教師のその姿勢が、信頼感を生んでいくのである。

### 情報共有の重要性

さらに子どもたちに最も近い担任の振舞いがいじめ問題の発見を困難にする。生徒からいじめを訴えられた時の担任の対応が、「一人で抱えて」いたり、「問題視しな」かったりということがあれば、子どもたちは相談をすることを躊躇し、担任に援助を求めることはなくなる。個人としての担任が子どもたちと向き合おうとすることはとても重要な教育的態度であるが、いじめという事案に直面した時には教師集団として解決に向かうことが必要である。当事者たちの情報を収集する場合、固定的な見方や偏向的な視点を防止するためにも多くの教師や子どもたちからの情報を収集する必要がある。また、保護者への対応や学級全体への指導、個別指導など、日常の活動以外の用務も増えることを考えると、担任には大きな負担がのしかかってくる。学校内外の教師や専門的知識を有した人たちと協力しながら問題解決に向けた取組を欠かすことはできない。どのような情報をどのように共有していくのか、有効な連携の仕方について確認しておくことは危機管理として大きな意味を持つ。

学校や教師集団、担任が「信頼」を取り戻すことがいじめの予防につながる大きなポイントであり、そのためには何よりも子どもたちの語りに耳を傾けること、相談を受けた場合には担任個人だけではなく、教師集団がチームとして対応することが必要性を述べてきた。教師がいじめと向き合ってくれる、自分に寄り添ってくれると感じたときに、生徒は自分の悩みを相談しいじめが重大事案となる前に発見される。ささいなことと安易に考えず、重大事案の起こる前に生じるインシデントを見逃さずに対応すること、教師の指導の第一歩はそこから始まるのである。

### (3) 発見方法の不備

これまでは、加害者、被害者、学校、教師といった要因であったが、それ以外に必要と考えられる要因についても検討してみよう。

### 見えないいじめ

いじめを発見しにくいのは、加害者・被害者の「二重の秘匿」の問題、教師と生徒の「信頼」の問題があることを述べてきたが、それ以外の理由についても本調査ではいくつか挙げられている。「教師の見えないところで起きている」いじめは、加害者が隠すことと軌を一にしており発見しようと教師が動かなければ見ることがない。

可視化することの必要性があるとする要因では、近年話題になることも多いSNSやネットを介しいじめの存在も指摘されている。インターネットメールを悪用したネットいじめについて一時期問題となったが、スマートフォンなどのハード面の技術革新やインスタグラム、ツイッター、フェイスブックなどのアプリケーションの増大に伴い、手軽に情報の受発信ができる現代においては、情報が錯綜する空間からいじめの情報を顕現化し可視化することは容易ではない。家族や友人たちから情報をいかに収集するのか、子どもたちの表情からどう読み解くのか、新たな時代への対応は急務である。

### 死角の存在

学校には、多くの死角がある。トイレや体育館など、教師の目が届かない場所でいじめは起きていることが報告されている。外部からの不審者への対応として監視カメラ等を設定している学校も近年増えてきているが、学校の内部に監視カメラが設置してあるという話は、それほど聞こえてはこない。加害者がいじめを隠そうとすることからも教師の死角でいじめは進行する。ネット空間、校舎の陰、公園の片隅、そうした死



表3 いじめを発見しにくい理由－必要と考えられる要因

対象	主な要因	定義	記述例	出現数
可視化	可視化の必要性1	教師の見えないところで起きている（学校外、トイレ）	先生から見えないトイレなどでいじめが起きている。	10
	可視化の必要性2（SNS）	教師の見えないところで起きている-2（SNSなど）	いじめは教室内だけで起きるものではないから（ネットやSNSなど）	19
調査	不十分な調査	調査方法が不完全	アンケートにうそを書けばいじめはなかったと結論づいてしまう。 アンケートをとっても本当のことを回答するとは思えない。	6

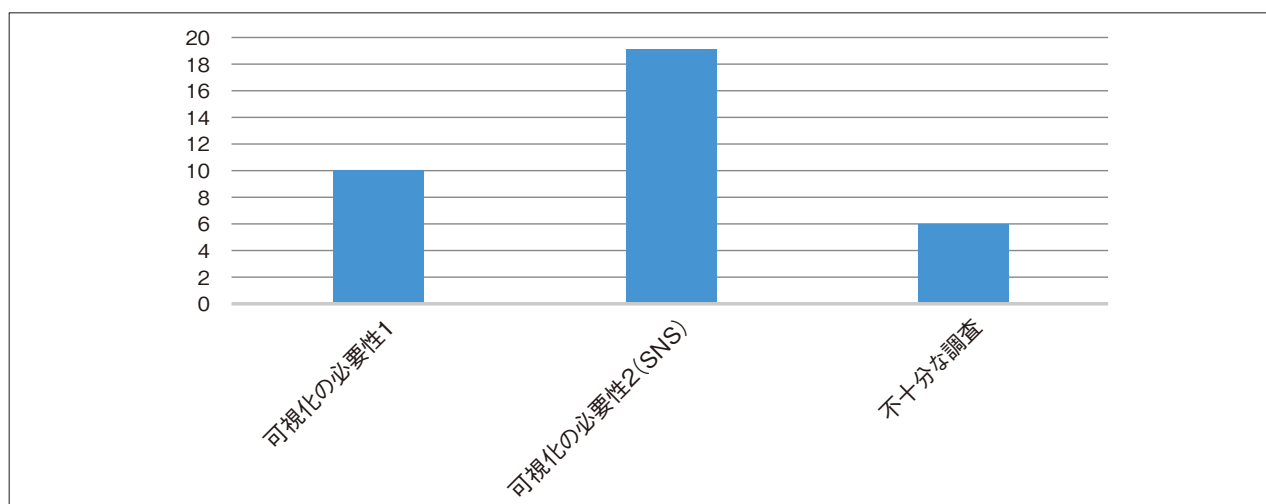


図3 必要と考えられる要因

角に潜む危険性から子どもたちの安全をどう守るかということは大きな課題である。そのための対応を考えることは喫緊の課題である。

#### いじめ調査の不完全さ

いじめ防止対策推進法が2013年に施行されてから、各校でもいじめ防止に対する対策を学校のホームページに掲載し、早期発見のためにアンケートを実施するようになった。年間1～2回のところから2月に一度程度の頻度で実施している学校もある。しかしながら、アンケートでいじめを発見することは、そうたやすくはない。「アンケートにうそを書けばいじめはなかったと結論づいてしまう」「本当のことを回答するとは思えない」という意見がそれを裏付けている。直接、大学生や中学・高校生から話を聞く機会があったが、その時に彼らが異口同音に言うのは「めんどくさい」というセリフであった。アンケートに回答することで教師からいろいろ聞かれたり、友だちに言われたりする、そんなもろもろのことがめんどくさい、のだ。調査方法を含め、どのようにしたら子どもたちをいじめの被害から守っていけるのか。「うちの学校は、アンケートを実施しています」という言葉が、ただの学校の“アリバイ作り”にならないよう、実効性のあるいじめの調査が求められている。

#### 2-2. いじめの早期発見のために

加害者・被害者による「二重の秘匿」の問題、教師－生徒関係の信頼性の希薄化、死角で起こるいじめ、などいじめの早期発見を阻害する要因について分析的にみてきた。

いじめを隠そうとする心性が、当事者である加害者・被害者双方に働き、それが時には問題化したくない

学校や担任の思惑と軌を一にした時に、一層、学校や社会の暗部に押し込められてしまう。つらい経験を、教師や周囲に訴えたとしても助けてもらえなかったりすると、次に援助要請することをためらってしまう。そんな現実が垣間見えるような調査結果であった。

いじめによる重大事案を防ぐために必要なのは、早期発見である。そのためには次のような準備が欠かせない。

- 1：子どもたちが援助要請しやすい環境を整える。
- 2：死角を作らない。
- 3：いじめの訴えを見逃さない調査を実施する。

そして、これら3つの前提としてもっとも重要であるのは 『教師が生徒と信頼関係を築くこと』 であることは、言うまでもないことである。

### 3. 授業を終えて

本授業は、一般的にアクティブラーニングには適していないと思われる条件（大規模、階段教室、固定机など）の中で行われたが、学生の関心は高く、熱心な取組が行われた。大規模であればあるほど、的確な指示と同時に目的を明確化する必要があることが求められる。教職に従事することを望む学生にとってのよりよい授業の在り方を、今後さらに検討していきたいと考える。

#### <参考文献>

森田洋司・清永賢二（1986）『いじめ－教室の病い－』，金子書房。

永井智，本田真大，新井邦二郎（2016）利益・コストおよび内的作業モデルに基づく中学生における援助要請の検討－援助要請の生起と援助要請後の過程に注目して－ 学校心理学研究，16（1）15-26。



（グループ討議の様子）

## 公開授業報告—いじめ等先端課題研究特論—

上越教育大学大学院学校教育研究科 教授 稲垣 応顕

### はじめに

本稿は、2017年6月22日（木）に上越教育大学で行われた『B-Pプロジェクト』公開授業（2つあった公開授業の1つ）、大学院生を対象とした『いじめ等先端課題研究特論』の報告である。授業担当者は筆者（稲垣）であった。また、本公開授業は担当5コマ中の2コマ目である。なお、この授業科目は平成28年度の大学改革で立ち上げた道徳・生徒指導コースの看板授業でもある。

公開した授業のテーマは、いじめ問題における予防教育としての『自己受容と他者受容』であり、用いた教材は自作の「森の動物と仲良くなろう」（松井・稲垣，2009）である。筆者の大学における授業担当領域は学校教育相談学であり、また自身の研究領域を教育カウンセリング心理学としている。授業は、当該の視点で構成している。

以下、教育カウンセリング心理学のコンセプトについて確認し、授業のコンセプトと指導案を掲げる。また、『B-Pプロジェクト』との関連において授業自体を振り返り考察していく。

### 教育カウンセリング心理学とは

教育カウンセリング心理学は、Carl Rogers以来のカウンセリングが受容・共感・自己一致という、一般にカウンセラーの三大態度要件を重視するとの知見を支持している。しかし、一般にカウンセラーの態度要件といわれる前述の3つの態度だけを示していれば、生徒は自ら成長（社会化）するとも考えにくい。教師にとっても、受容・共感・自己一致の態度だけで生徒の教育に当たるといのはかなり無理がある。学校とは教育機関だからである。学校教育活動において、教師は日々の学校教育活動として教科（学習）指導と生徒指導、すなわち『指導』を行っているのである。いじめ問題についても、教師はスズメの学校のように「鞭を振り振りチーパッパ」する必要はないが、メダカの学校のように「誰が先生で誰が生徒か分からない」状態ではいられない。教育カウンセリング心理学は、従来のカウンセリングの考え方と手法を『是』としつつも、そのまま学校に導入するというのは難しいという問題意識の解決を基盤としている。

このことに関連して犬塚（2011）は、「カウンセリングと生徒指導は、最終段階で折り合いがつかない」と述べている。筆者は高校の教員であった経験から、この見解にうなずくところが大きい。0か100かの議論をするつもりはない。しかし、従来のカウンセリングが生徒に対して『枠はずし（快樂原則での関わり）』を行うのに対し、学校教育、殊に生徒指導は社会性の育成という『枠づけ（現実原則を前提とした関わり）』を行っているとの見解は的を得ているように思われる。筆者は、その溝を埋め得るのが教育カウンセリングの視点であると考えている。すなわち、筆者の感覚では従来のカウンセリング心理学と教育カウンセリング心理学の両者は、生徒を実存的な存在＝「生徒は宇宙の中で後にも先にも唯一絶対の存在であり一人一人が尊い」という所では共通している。そして、「人間は、何故尊いのかの議論に際しても、『それに理由などない』。生徒は、存在すること自体が尊い」（稲垣，2013）と捉えるところでは共通する。教育カウンセリングは、その上でさらに4点の特徴（独自性）をもつ。それは、①治療モデルではなく教育（開発）モデルを採用する、②クライアントの鏡になることに徹し中立性を保つのではなく、生徒との対峙を恐れずガイダンスを行う、③治療構造を組み個別対応を行うことをあえて放棄し、あらゆる教育場面を活用して個別対応と共に集団対応（活動）を行う、④治療プログラムではなく教育プログラム（＝ガイダンスプログラムとインストラクションプログラム）を有する、ことである。教育カウンセリングは、従来のカウンセリングが「教えようとするな。治そうとするな。解ろうとせよ」を標榜するのに対して、「教えてください。直し

てください。ただし、解ろうとしながら」と提唱する。これらの特徴は、生徒を指導すること、中央教育審議会（2013）が「21世紀型能力（21世紀を生き抜く力）」として提言する、「生徒は知っているだけではなく、その知識を実践に移せることが重要である」との見解と共通する。いじめ問題に特化すれば、「いじめは許されない」ことであるのは、生徒の耳には充分浸透している。彼らは知ってはいるのである。

教育カウンセリング心理学を提唱した国分（2009）は、その実践である教育カウンセリングのコンセプトを「育てるカウンセリング」と呼称している。このコンセプトは、それを支持する教師また同じ名称のつく協会ないし学会のメンバーにより「教師にとって使い勝手のよいカウンセリング」を目指し開発研究が進められている。

筆者は上述の国分による論考を支持している。繰り返すが、学校はあくまで教育機関である。また筆者は、前述の通り“学校教育相談”関連の授業を担当している。筆者は、教師また教師を目指す学生に対してカウンセラー養成をしたいとは考えていない。教師のアイデンティティーは、あくまで教師であってほしいと考える。

### 授業公開に臨む筆者のビリーフ

筆者の当該授業に対するビリーフの1つは、予防的・開発的視点に立つ「教師が使えるカウンセリングの理論と方法の伝達」である。

前述の通り、本授業で取り扱うエクササイズ（以下、ネタと記述）は教育カウンセリング心理学が掲げる予防的・開発的視点による集団対応（活動）のプログラム、具体的にはピア・サポート活動におけるピア・サポーター育成を意図して独自に開発したものである。その発想は、今日の生徒指導・学校教育相談と同一の考え方であると自負している。すなわち、学校現場にとっても受け入れやすい発想と方法ではないかと考えている。

もう少し具体的に述べれば、教室の中では原則として教師が一人なのに対して生徒が複数人である。教師が、常にすべての生徒の心理状態を把握して個人への細かな対応が出来ればよいのであろう。しかし、多忙を極める教師には難しい側面がある。また生徒にとっても、自身に悩みや問題が生じた際に真っ先に相談する相手は、以前現在も変わらず教師ではなく仲間＝友人である（このことは、本年度、本プロジェクトの個人研究として上越教育事務所とタイアップして行った新潟県上越市の中・高校生2,473人のアンケート－比較対象は2005年に行った富山県富山市の中学生2,430人の同アンケート結果－からも明らかである；2017.10.1「深めよう 絆！県民の集い いじめ見逃し「0」運動」で話題提供／本報告書の個人研究の頁で内容を記載）。いじめ問題をはじめとする生徒指導上の問題の多くは、人間関係の不調に起因する。そうであれば、いじめ問題の予防として、生徒同士が互いを理解し合い良好な関係性を形成・維持できればよいのではないかと考える。相互に悩みを打ち明けあえ、支えあうピア・サポート体制が構築できればよいのではないかと考える（極めて単純思考であろうか？）。整理すれば、学校ないし学級などの集団内で良好な人間関係があれば、いじめ問題はある程度抑制できるのではないかと考えるのである。そして、それは可能な限り具体論（具体的な方法）として伝えられることが望ましい。

『B-Pプロジェクト』で上越教育大学が担っているテーマは、いじめ問題の予防に寄与するカリキュラム開発である。その意味からも、ピア・サポート体制を構築するようなプログラム開発は当プロジェクトと密接にリンクすると思われる。

なお横道にそれるが、筆者はピア・サポート体制の構築には、生徒たちが本来性として有していると信じていたい『優しさ』（『優しい』の漢字は「人」が「憂う」と書く。人の憂いが解ることが優しいことであり、憂う人の傍らにいる人を優しい人という：筆者／また、「やさしくね やさしくね やさしいことは つよいことだよ」（あいだみつを）の言葉もある）を引き出す、教師からの継続した＝プログラム構成された積極的・能動的・戦略的な関わりが有用であると思われる。小手先のテクニックはボロが出るが人間性は普遍性をもつ。繰り返すが、学校とは生徒の人格の形成を期す教育機関であり、人間は学習する存在である。

## 公開授業のコンセプトと指導案

生徒たちのピア・サポート体制を構築する際の順序性として、筆者は生徒個人々の“自己理解と自己受容”→“他者理解と他者受容”→“グループコンセンサス”の各能力の育成と向上が必要であると考えている（稲垣 2001, 2013；稲垣・松井 2010,；稲垣・小林・丹保2004,；小林・稲垣・丹保 2003,；山田・犬塚・稲垣 1996 et al）。また、良好な関係性形成の能力も、その順序性で育つのではないかと考えている。

自己理解とは、自分の長所と短所を理解することである。そして、自己受容とは、自己理解した長所と短所の両面を持つのが自分であると、等身大の自分を受け入れることである（これは、決して自分に対する甘やかしではない。そこが、すべてのスタートラインである）。何故ならば、自分のことも愛せない人が周囲の人を愛せるはずがないからである。自己受容の出来ないままに他者の問題に首を突っ込んでいくことを“おせっかい”という。また、ナルシズム・エゴイズムの表れという。そして、真の意味での自己受容ができる人には“ゆとり”が生まれる。あるがままの自分で良いと思えるからである。そして、そのゆとりは他者理解・他者受容へと展開していく。自分が100%でも完全でもないことに気づいた生徒は、他者もまた100%や完全であるわけではなく、そうである必要もないと気づいていく確率が高い。そのような視点で仲間を見たときに、好き嫌い・気が合う合わないを超えた、長所も短所もある等身大の相手を認める態度、換言すれば（大袈裟かもしれないが）“最終的には同じ人間同士”という生命としての実存にまで触れ、共通感覚（common sense）＝仲間意識をもつことが可能になるのではないかと考える。生徒個人々がそのような素養をもったとき、“価値観の異なる他者と仲良くしていこう”とするグループコンセンサスの意識が芽生え良好な関係性が形成され得るのではないかと考える。換言すれば、いじめ問題の防止につながるのではないかという事である。

本公開授業で取り上げたネタは、自己理解・自己受容の課題を終え、他者理解・他者受容の課題に移る橋渡しである。以下、本授業の指導案（略案）を記す。なお筆者は、このネタを研修会などで小学校3年生から社会人（教員）研修までの年齢層に用いた経験がある。

なお、本公開授業の一般学習目標、個別的行動目標、学習方略は、下記の通りである。

### 一般学習目標（general instruction objective；GIO）

21世紀は協働が重視される社会でもある。そのような社会を生きる（生き抜く）ためには、良好な人間関係形成能力が不可欠であると思われる。そして、それは保護者や教師を主とする周囲の大人のモデルにより左右される側面が大きい。種々の悩みや課題を有する生徒の気持ちに寄り添った教師を目指す態度、また良質な指導・支援を行う前提としての良好な人間関係形成のためのコミュニケーション能力向上に向けた基本について、アクティブ・ラーニングを通して実感として学ぶことを一般学習目標とする。

### 個別的行動目標（specific behavioral objectives；SBO）

良好な人間関係形成能力の獲得には、やはり順序性がある。その始まりは生徒一人一人の自己理解の深化と等身大の自分の受け入れられる自己受容能力であろう。自己理解がないままに自己肯定や自分を愛するということは、エゴイズムまたナルシズム以外の何ものでもないからである。

そこで、自己理解・自己受容を深める課題を通してself-control力、他者理解・他者受容を深める課題を通して指導・支援の中核をなすwarm-heart力（＝感受性・共感性）、グループコンセンサスを深める課題を通して、生徒指導を担う教師としての専門性を高めるうえで不可欠なcool-head（＝状況判断力・問題解決力・（次の）課題提案力）を個人のみならず協働するグループのメンバーとの関わりにより体験学習することを個別的行動目標とする。

### 学習方略（learning strategies；LS）

本授業の担当分5コマを全てアクティブ・ラーニングで構成する。具体的には、第1コマで自己開示を伴

う自己紹介（『私を示す20の問いかけ』）を行うと共に、『私の取り扱い説明書』のワークにより、人は誰でも優しく丁寧に扱われたい欲求をもつことを実感として理解するよう促す。次いで、2コマ目で（本公開授業）で『森の動物と仲よくしよう』のワークにより、自分がしてもらえたら嬉しいこととされたいやな事、反転すれば、他者にしてあげたらよいと思われることと共に、してはならない（しない方がよい）事を具体例に即しながら実感する。その上で、3回目には『若い女性と水夫（Ⅱ）』のワークにより自分の価値観が絶対ではないこと、同時に他者への思いやりや共感の気持ちを体験する。4コマ目では『スクウイグル画（協働絵画）』、5コマ目では『108便』のワークにより教師にとってのリーダーシップと協働という課題を体験学習する。

## 公開授業の実際 （指導案）

### 森の動物と仲良くなろう！

#### <ねらい>

- ① 良好な人間関係を築くために、どのような態度や行動を取ってはいけないかを考える
- ② 良好な人間関係を築くために、どのような態度や行動を取ればよいかを考える

#### <グループサイズ>

- ・1グループを5人程度とする（本授業の受講生は、30人であった）。

#### <必要な物品>

- ・ワークシート（資料1）
- ・鉛筆
- ・黒板
- ・チョーク
- ・振り返り用紙



#### <実施の手順>

- I. ウォーミングアップ（3～5分）
- II. 展開

エクササイズの内容を伝える。（3分）

森に住む野生の動物と仲良くなる方法をみんなで考えることを提示する。

通し、初対面の仲間と良好な関係を築くための方法を具体的に考えることをテーマとする。

エクササイズの場面設定を教示する。

教師（以下、リーダーと記述）は、「これから、場面設定をします。目を閉じてイメージしながら聴いてください。今日はとても天気が良く気持ちの良い日です。あなたは、近くの森林公園へ散歩に行きました。風がさわやかでとても気持ちが良いです。あなたは、芝生の上で横になってみたり背伸びをしたりリラックスしています（実際に、背伸びをしてリラックスするように促す）。

ところで、あなたが立っている公園の芝生の後ろには、森が茂っています。ふと、背中に気配を感じ振り返ると、森と公園のちょうど境目に小さな動物が”ちょこん”と座っていて、あなたの方を見ています。はい。目を開けてください」などと語り口調で話す。

各自でワークシートを記入する。(ワークシートへの記入終了まで、5～10分)

・リーダーは、「あなた方の課題は、森と公園の境目にいる小さな動物と仲良くなれる方法を考えることです。小さな動物が・・・

① 森からあなたのいる芝生の方へ出てきてもらうために(仲良くなるために)、何をするか

② 森の中へ逃げてしまわないために(仲良くなるために)何をしてはいけないか

以上2点について、思いつくまま多くのアイデアを書き出して下さい。その際、動物は野生のものであり、人間には慣れていないし、ましてや人間の言葉は通じません」などと伝え、ワークシートを配布する。また、ワークシート(巻末資料1)にアイデアを書き込むよう促す。

グループ内で発表する。(およそ15分)

・5人程度のグループを作り、顔を向かい合わせて座る。

・グループ内で、自分の思いついたアイデアを発表し合うよう促す。

※その際、グループ内で自分の気付かなかった他のメンバーから出されたアイデアを書き留めるよう促す。

全体で発表する。(およそ15分)

・グループ内で、代表者を決め全体会で発表するよう促す。

・各グループの代表者に、「してみること」と「してはいけないこと」の順序で発表するよう促す。

・リーダーは、出されたアイデアを黒板にメモ書きする。

(可能な限り全てのグループに発表の機会を与える。時間が足りないときは、偶数番号または奇数番号のグループ発表とし、発表できなかったグループには個人でのアイデアを含め、「その他のアイデアを思いついている人は？」などと教室全体に問いかける。もしくは、全グループに「グループ内で、出てきたアイデアのベスト3を選んで発表してください」などと働きかけ、全員が自分のアイデアや意見を教室全体のディスカッションにおけるテーブルに乗せられるよう配慮する)。

### Ⅲ. 小講義 (10～15分)

エクササイズのとめを行う。

・各グループのアイデアが出揃ったら、リーダーが“置き換え”の要領で仲間に対して、友達になるために「してみること」と「してはいけないこと」に変換した意味づけを行う。

ex) <してはいけないこと> 追いかける → 相手が逃げたくなるほどの嫌なことをする  
追いつきをかける

<してみること> 急に近づく → 相手との信頼関係が出来ていなのに接近する

餌を与える → 相手の喜ぶことをしてあげる

鳴きまねをする → 相手の特徴を認めて、それを共有する

(人間は、自分と同類だと思えると安心感をもつ特性がある) など

※授業のとめとして、

1.では、「小さな動物」という設定で行ったが、これは良好な人間関係、特に新しい仲間を作ろうとするときのポイントや配慮事項と同等であることを説明する。

2.その上で、「してはいけないこと」、「してみること」の順で、出されたアイデアを実際の「対人関係場面」に当てはめながら置き換える。

### Ⅳ. シェアリング (約10分)

グループ内でシェアリングを行う。

- ・課題を通して、これまでの仲間との人間関係を振り返ることを促す。
  - ・エクササイズを通して思ったこと、感じたことなど、感想を述べ合う。
- ex) 今まで、相手の嫌がることはしていなかったか、相手を思いやり関わっていたか  
 友達や家族にとって、一番喜んでもらえること、一番嫌がられることはどんなことか など
- ※時間に限りがある場合は、シェアリング内容を小講義に盛り込むことも可能である。

全体においてグループごとの発表を行う。

- ・代表者がグループ内の意見・感想をまとめて発表する。

## V. 振り返り（残りの授業時間）

振り返りシート（巻末資料2）の記入を促す。

### <留意点>

- ・リーダーには、“置き換え”の能力が求められる。これは、認知療法で用いられる“リフレーミング”技法と同様に、一つの物事を多方面から捉え直し意味を変えずに言い換える力である。

### <展開>

学級その他の集団において、互いが本エクササイズで出されたアイデアを実践するよう心がけると、良好な人間関係が形成されやすい。その基本は、自己受容と他者受容の態度にあることを伝える。また、それは“どのように話すか”、“どのように聴くか”、に関わってくるの趣旨を伝え、次回以降の授業につなげる。教師は、折に触れ本エクササイズで出されたアイデアが教室内で実行されているかを確認するとよいであろう。

## 結果と考察

本授業の意図は、いじめ問題の発生以前にいじめ防止また予防教育として、自分ないし他者がしてもらいと嬉しいことと嫌なこと、換言すれば周囲の人に対してした方が良いこととしてはいけない事を具体論として再確認するよう促すことである。また、受講生自身が教壇に立った際、自分が確認したことを生徒に心理的負荷をかけずに伝える方法を習得するよう促すことである。

授業の振り返りシートにおける学生の評価は、いずれの項目も平均で4.5点以上（5点満点）であった。また、自由記述欄における記載内容も「他のメンバーのアイデアを聞くのが楽しかった」「他の人のアイデアがすごいと思った（自分には思いつかなかったことで勉強になった）」「初めから、子供たちと仲良くするための方法なんだろうなあとは予測がついたが、出されたアイデアがあのように置き換えるというのが面白かった」「こんな簡単なネタで友達関係を考えられることに驚いた!!」「内容も構成も（失礼だが）単純で、小学生でもやれると思った」「小学生でも実施可能なネタに“はまって”、ムキになった自分がかわいい；笑)」などが書き出された。

筆者としては、公開の授業でありながら院生たちが普段に近い状態で授業に臨んでくれたことを嬉しく感じている。受講生が記しているように、本授業の内容は極めて単純である。しかし、単純だからこそ取り組みやすく盛り上がったことも確かなのであろうと思われる。このことについて筆者は、以前、前任校で行ったシンポジウムに東京大学の市川伸一先生を招いたことを思い出す。先生は、“よい授業”として、楽しい授業を求めることには反対しない。しかし、楽しいだけの授業にはおのずと限界がある。世の中には授業以上に楽しいことが沢山あるからである。また、授業とは、勉めを強いることであり、いわば強制である。それでは、よい授業とは何か。それは、“わかりやすい授業”である。解りやすければ、子供（学生）は食いついてきてくれる、との趣旨を話された。本授業は、単純であるが故にわかりやすかったともいえるかもしれ



れない。

また、グループでのアイデアの出し合いは、何となくの一体感、共同体意識を生じさせていたようにも感じる。授業後に、たまたま同じグループになった者同士が談笑する光景が認められたからである。他者のアイデア＝発想力に刺激され自身の知的好奇心が掻き立てられた様相も窺われた。自由記述に「こんな簡単なネタ」とか「単純なネタ」など、通常、教師に提出するペーパーに記載するには乱暴で失礼な表現を用いてくることに対しても、それだけ授業者と授業内容を身近なものトリラックスして捉え取り組めた証ではないかと自負している。そして、前述のリアンション・ペーパーでの自由記述であるが、仲間のアイデアを「すごい」と思う感覚に、この先の良好な人間関係づくりに柔軟な視野が開かれることを期待する。また、授業などで「いじめを予防する（なくしていく）ためには」との問いを掲げると、受講生からは「道德教育を活用して」との反応が良く帰ってくる。もちろん、道德教育によりいじめ防止の規範意識を育成することは大切かつ重要である。しかしもう一点、本授業公開でのネタなどにより、「して見ること」と「してはいけないこと」を具体的に表現させつつ、“自分がされたいやなことは他者にもしない”だけでなく、どうしたら仲良くなれるのか、他者は嬉しいのかに気づかせることも一つであるように感じている。

今後の課題としては、そしてこのことはいつも感じることであるが、受講生から出されたアイデアを置き換え不可能という場面に出くわした時への対処法があげられる。もちろん、受講生に「誰か、これを置き換えられる？」と問いかけることは考えられる。しかし、授業者自身が常に思考を自由なんにしておくことが求められよう。また、学校におけるカリキュラム構築という視点から、積極的・能動的・戦略的などのような流れで寿儀容を実践していけばよいのかについて、さらに精緻な検討が必要である。

## 文献

- 稲垣応顕（2001）小学生の性教育の効果に関する一研究－自己・他者受容の変容に着目して－. 富山大学教育実践総合センター紀要, 2, 59-66
- 稲垣応顕（2013）学校教育相談（教育カウンセリング）における理論背景とビリーフ. 上越教育大学研究紀要, 32, 35-43
- 稲垣応顕・小林真・丹保弘則（2004）高校生に対する構成的グループエンカウンターの効果. 富山大学教育実践総合センター紀要, 5, 123-129
- 稲垣応顕・松井理納（2010）「思いやり」と「感謝の心」を育む宿泊体験学習に関する検討－小学生を対象としたプログラムの試みとその結果－. 上越教育大学研究紀要, 29, 23-32
- 小林真・稲垣応顕・丹保弘則（2003）高校生に対するソーシャルスキル・トレーニングの効果. 富山大学教育実践総合センター紀要, 4, 15-23
- 国分康孝（2009）教育カウンセリング概説. 図書文化
- 松井理納・稲垣応顕（2009）集団を育むピア・サポート－教育カウンセリングからの提案－. 文化書房博文社
- 中央教育審議会（2013）求められる資質・能力の枠組み試案.21世紀型能力.（最終得閲覧日, 2017.12.28）tb.sanseido-publ.co.jp/28/21skill/21skill.
- 国分康孝（2009）教育カウンセリング概説. 図書文化
- 山田洋子・犬塚文雄・稲垣応顕（1996）自己及び他者受容を向上させる体験学習－コミュニケーションワークショップの体験効果に関する一研究－. 看護教育, 37, 6, 439-444
- 巻末資料1 ワークシート, 資料2 振り返りシート

【巻末資料1】

**森のどうぶつと友だちになろう!**

お名前 \_\_\_\_\_

< 友だちになるために行ってみる事 >

< 友だちになるために行ってはいけない事 >

【巻末資料2】

公開授業 振り返りシート

専攻/名前 \_\_\_\_\_

1. あなたは、今日の授業

2. に参加してどう感じましたか

	とても	やや	普通	やや	とても
	よい	よい	よい	わる	わる
①→あなたは 今日の内容に興味・関心がもてましたか	1	2	3	4	5
②→あなたは 今日の内容を積極的に取り組みましたか	1	2	3	4	5
③→あなたは 今日の内容に興味・関心から発表しましたか	1	2	3	4	5
④→あなたは 今日の研修がこれからの自分に役立つと思いますか	1	2	3	4	5

2. あなたは、今日の研修での自分を振り返りどう感じましたか?

	とても	やや	普通	やや	とても
	よい	よい	よい	わる	わる
①→あなたは グループや他の人達と話し込むことが出来ましたか	1	2	3	4	5
②→あなたは 自分の言いたいことが言えましたか	1	2	3	4	5
③→あなたは 他のメンバーの話を積極的に聴きましたか	1	2	3	4	5
④→あなたは 他のメンバーと 分かり合えた感じましたか	1	2	3	4	5
⑤→あなたの属していたグループの雰囲気はよかったですか	1	2	3	4	5

3. 今日の研修活動を振り返って、次の質問に思いっつくことを自由に答えて下さい。

(1) 今日のワークで、良好な人間関係を形成するために必要なことは何だと思いましたか

(2) 今日のワークで、いじめ問題の予防・防止に寄与するアイデアがあったら教えてください

4. その他 今日ワークを通して、思ったこと、感じたこと、考えたことを自由に書いてください

※公開授業、お疲れさま～!!

### 3 研究協議会

#### 出席者

宮城教育大学	熊野 充利	理事・副学長
	本 凶 愛実	教授
	藤代 正倫	学長付特任教授
	久保 順也	准教授
	菊池 均	特任准教授
	我妻 良行	准教授
鳴門教育大学	阿形 恒秀	教授／いじめ防止支援機構長
	池田 誠喜	准教授
	竹口 佳昭	研究員
	栗尾 勇	企画課長
福岡教育大学	村山 嘉審	事務局次長兼連携推進課長
上越教育大学	川崎 直哉	学長
	林 泰成	副学長・上越教育大学BPプロジェクト実施責任者
	稲垣 応顕	教授
	高橋 知己	准教授
	山田 智之	准教授
	清水 雅之	准教授
	留目 宏美	准教授
	細谷 敏明	教育支援課長

- (1) 上越教育大学 川崎学長挨拶
- (2) 各大学代表よりご挨拶
- (3) 公開授業について意見交換

#### ①授業者による説明

まず、2校時に、学部生対象授業『初等特別活動論』を担当した高橋より、授業についての説明があった。

今回の授業は、10コマ目の授業であり、9コマから11コマまでの3回、いじめについて取り上げる。参加者は229名。グループ編成は初の試みだったが、スムーズに実施できた。活動のねらいが明確であり具体的に手立てを講じれば、学生は主体的に取り組む。学生たちには、教職に就く前の構えをつくってあげる必要性を感じている。

つづいて、3校時に、大学院対象授業『いじめ等先端課題研究特論』を担当した稲垣より説明があった。

今回の授業は10コマ目。この授業自体は、4人が担当するオムニバス形式の授業である。授業づくりの柱は「いじめの重大性」と「良好な人間関係づくり」である。今回は、小学校2年生でも使えるエクササイズを使った。次コマでは、どうしたらいじめを抑制できるのかを、KJ法でまとめていく予定である。

#### ②学部生対象授業『初等特別活動論』についての意見交換

「瞬時にグループをつくり、活動し、発言していく状況に刺激を受けた」、「学生の本音がきちんと表出されていたディスカッションであった」などの感想があった。

質問として、「いじめ／いじり」の違いは何かという学生の声が聞かれたが、いじめの定義はどこで示していくのか」と問われた。高橋は、「いじめの定義は前コマで押さえたつもりだが、学生の反応をみると抜

けていた。学生は自分なりに腑に落ちていないのではないか。「いじり」と「いじめ」の違いは、その子をどう生かしていくのかに左右されるのではないか」というような説明があった。

授業ではいじめのアンケートについて学生たちに議論をさせたが、そのことに関連して「いじめ発見の根幹にかかわることだが、アンケートに書かない、言語化できない、認めたくないという学生の声があった。大事な要素、つぶやきだと思う。今後、この要素をどのように深めていくのか、生かしていくのか」という質問があった。高橋からは、「アンケートの内容、様式（記名・無記名）に焦点を絞り、ディスカッションをつめていくことも一つの側面として展開できたかもしれない。言語化できるアンケートを提案していきたい（例：投映法やSCT）」との回答があった。

「いじめ、学校生活など様々なアンケートが実施されているが、子どもがSOSを出すのは、定期のアンケートではなくその時その時である。その都度、SOSをすぐに発信できるアンケート（例：企業のパワハラアンケート）があっても良いのではないか」という意見や「教師を信頼していないから伝えないのではない、「俺たちで解決するんだ」という子どもの思いがある。それが抜け落ちている議論が多いと感じていたが、今日のディスカッションではそうした観点が学生から出されたので、嬉しかった」という意見もあった。

### ③大学院対象授業『いじめ等先端課題研究特論』についての意見交換

「全国平均40%の中学生は、いじめられる側にも何か原因があると考えている。この認識を少しずつ変えていくために、教育活動全般で取り組む必要がある」との感想があった。

稲垣からは「学部生・大学院生にもいじめられる側に原因があると認識している割合が2～3割いる。この割合を反転させる必要がある」との説明があった。

「学生にいじめた経験、いじめられた経験をたずねると、おそらく半数以上が「ある」と回答するだろう。だが、きちんと学べば着実に自己変容を実感できると思う。学生の自己変容のプロセスをどのように捉えているのか」との質問があった。稲垣からは、ピアサポート活動を通じた学生の自己変容をポートフォリオでたどった実践の話があった。

「修士課程の授業であったが、学び続ける、理論と実践の往還について意識していると思われる。その点について教えてほしい」との質問があり、稲垣からは「アクティブラーニングを必ず取り入れる、理論について触れる」、高橋からは「監獄実験、ソーシャルキャピタルなど社会・集団心理学の基礎理論に触れている。理論に触れないと実践を分析できないため」、林からは「昨年度の授業のリフレクションシートで「抽象的」という感想があったので、今年度はケーススタディを取り入れる予定である」、山田からは「いじめの考え方、実際の捉え方という枠組みで行っている」と、オムニバスで担当している4名から返答があった。



研究協議会記録写真

### 1 友達関係についてのアンケートとシンポジウム

上越教育大学大学院学校教育研究科 教授 稲垣 応顕

#### はじめに

いじめ問題とは、子供たちの友達（仲間）関係の不調ないし悪化に起因することは論を待たない。そこで、上越市教育事務所と共同し、『友達関係について』の質問紙調査を行った。対象は、当該事務所管内の中・高校生2,466人（中学生1,046人、高校生1,420人）であった。結果は、2017年10月1日（日）開催の「県民の集い『深めよう絆 いじめ見逃し0県民運動』上越大会が独自に実施した「ストップ・ザ・いじめ 本音トーク」（参加者約600人：主催者/コーディネーター 筆者）で話題提供した。

#### 調査の内容と実施方法

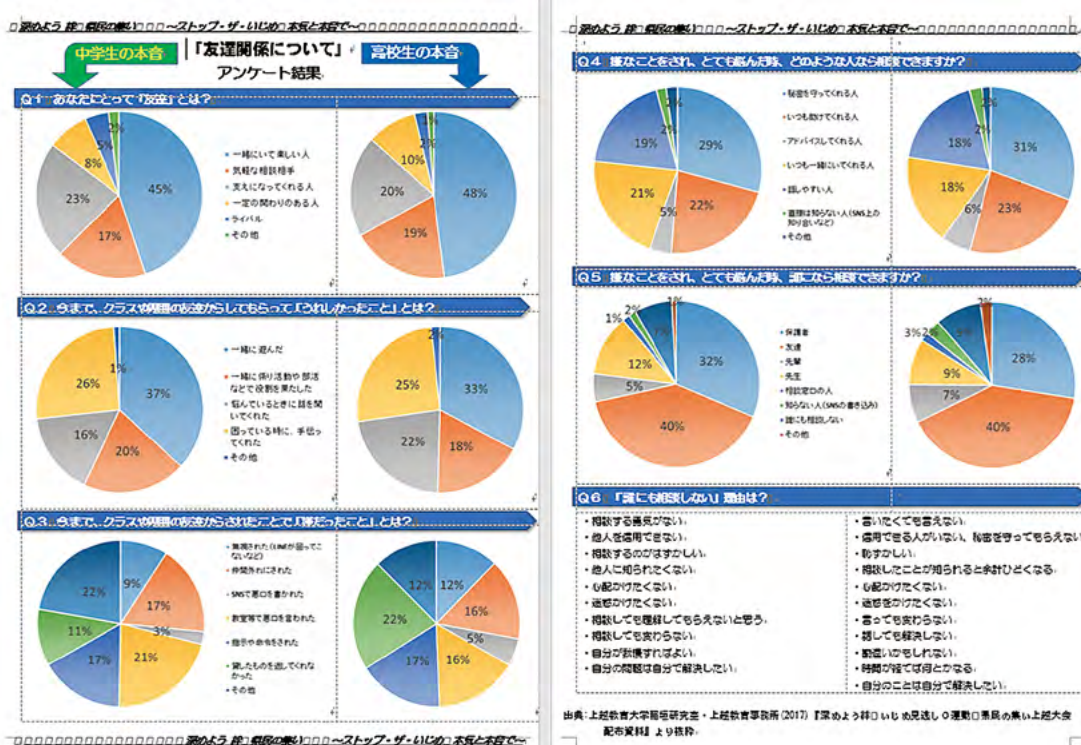
1. 調査内容：稲垣（2005）による『友達関係を考える』の調査研究（富山県富山市の全中学校21校が対象/富山市PTA連絡協議会と連携）を基に6項目を設定した。具体的には、「Q1あなたにとって『友達』とは?」、「Q2 今まで、クラスや周囲の友達からしてもらって『うれしかったこと』とは?」、「Q3 今まで、クラスや周囲の友達からされたことで『嫌だったこと』とは?」、「Q4 嫌なことをされ、とても悩んだ時、どのような人なら相談できる?」、「Q5 嫌なことをされ、とても悩んだ時、誰になら相談できる?」、「Q6 誰にも相談しない理由は?」であった。
2. 実施方法：上越教育事務所が配布・回収を担当した。分析は、筆者の研究室が担当した。
3. 本音トーク：生徒4名（中・高校生各2名）と大人4名（中・高校生の保護者でもある教師各1名、保護者会の代表、青少年育成センター所長）がシンポジストとして登壇した。

#### 結果と考察

以下、数値は（中学生/高校生）である。友人意識は、中・高校生ともほぼ同じであった。「Q1」では、上位から「一緒にいて楽しい人（45%/48%）」、「気軽な相談相手（23%/20%）」、「Q2」では、「一緒に遊んだ（37%/33%）」、「困っている時に、手伝ってくれた（26%/25%）」であり、稲垣（2007）とも同じであった。「Q3」では「SNSで悪口を書かれた（3%/5%）」が特徴的であった。ネットいじめが注視される中、数値の低さは意外であり再調査が必要である。「Q4」では、上位から「秘密を守ってくれる人（29%/31%）」、「いつも助けてくれる人（22%/23%）」、「Q5」では「友達（40%/40%）」、「保護者（32%/28%）」で、稲垣（2005）とも同じであった。第3位が、中学生では「先生（12%）」、高校生では「先生（9%）」と「誰にも相談しない（9%）」が並んだ。中学生の第4位は「誰にも相談しない（7%）」であった。注目すべきは、「先生」と「誰にも相談しない」の数値である。先生にまで相談する程ではなく、友達や保護者への相談で事は済むとの解釈も成り立つ。ただし、「Q6」の「信用できない/秘密を守ってもらえない」、「相談しても理解してもらえないと思う」「自分が我慢すればよい」などの回答と重ね合わせる必要はある。「Q5」で「誰にも相談しない」と回答した生徒で、「Q6」に無回答の生徒も気になる。なお、シンポジウムで生徒側から発せられた「先生は、気持ちを無視して問題の解決だけを急ぐ」、「大人は『言ってくれればいい』と言うけど、自分達からは言えない。大人が上手に誘ってくれなければ、とても言えない」言葉は一考を要する。

#### 文献

稲垣応顕・尾崎康子・永田純子・島田みどり・谷尾千里（2007）「中学生における友人意識についてのアンケート調査」, 富山大学スクラムプラン-学校バリアフリーへの挑戦-2007,105-112.



## 2 いじめの報告書について考える

上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 高橋 知己

いじめの重大事案が発生すると、「なぜそんなことが起きたのか」「どうすればよかったのか」という思いを、教育関係者のみならず抱く。いじめ事案への対策は、どのように講じていけばよいのだろうか。

その手がかりを、不幸にして起こってしまった事案に対する、いわゆる第三者委員会の報告書に求めてみたい。第三者委員会の報告書は、事実関係をつまびらかにすることともに再発防止のためにどう取組んだらよいのかを提言することもその役割の一つとしている。

実際に報告書に接してみると、被害者の方やそのご家族の悲痛な思い、苦衷が述べられており、胸が詰まる思いであった。隠蔽されていることも多く、それを丹念に解きほぐしてまとめられた書く調査委員会の方々の努力にも敬意をもって読ませていただいた。そんな全国の報告書から何を讀取りそれをどう次につなげていけばよいのか、この章では考えていきたい。

本論で分析の対象とした報告書は、いずれも公開されている以下の3本である。

最終閲覧日は、いずれも平成29(2017)年2月23日である。

○湯河原町いじめに関する調査委員会調査報告書 平成26年3月2日

<http://www.town.yugawara.kanagawa.jp/global-image/units/61836/1-20140307154207.pdf>

○名古屋市立中学校生徒の転落死に係る検証委員会検証報告書 平成26年3月27日

<http://www.city.nagoya.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000058/58391/houkokusyo.pdf>

○矢巾町いじめ問題対策委員会調査報告書【概要版】 平成28年12月23日

<http://www.town.yahaba.iwate.jp/docs/2016122300018/files/20161223133846052.pdf>

### 1. 調査報告書(検証報告書を含む)の構成

3本の調査報告書の構成を目次によって確認してみよう。(ただし一本は概要版であることに留意されたい。)

3つの報告書の目次のうち主要な部分を抽出したのが表1である。

それぞれの事案の特徴もあることから表現の仕方や章・節の構成には差があるが、段落を考えると大きく5つに分類できることがわかる。

第1段落 調査委員会の設置に関する経緯。法的な根拠等。

(湯河原－1及び2                  名古屋－第1章                  岩手－第1章)

第2段落 事案の概要。いじめの事実認定に関すること等。

(湯河原－3                  名古屋－第2章                  岩手－第2章1節)

第3段落 いじめと自殺との関連、経緯等。

(湯河原－4, 5                  名古屋－第3・4章                  岩手－第2章2節)

第4段落 事後対応について等。

(湯河原－6                  名古屋－第5章                  岩手－第2章3節)

第5段落 提言。おわりに。

(湯河原－7, 8                  名古屋－第6章, おわりに                  岩手－第3章, 以降)

つまり、調査報告書は

「なぜ調査委員会が設置されたのか」「この重大事案では何が起きたのか」

「事案といじめの関係性についてはどうなのか」「事後の対応はどうだったのか」

「これからどうしていくことが求められるのか」

ということに答える形で構成されているのである。こうした構成の在り方は、3つの報告書の広い意味での共通点であるといえる。

## 2. 報告書から見えてくること

3事案の報告書は、仔細に読むことで事件の背景やそうした状況を生んでしまう問題点について詳細に記述している。しかし、それはあくまでも事案の一部に過ぎないことをわれわれは銘記すべきであろう。被害者がなぜ自死を選ばなければならなかったのか、希死念慮を取り払うことがなぜできなかったのか。それを食い止めることができなかったことを深く心に刻みながら、それでも次の被害者を生まないために我々は何ができるのか、何をしなければならぬのかを考えていきたいものである。

矢巾事案の最終段(概要版p14)では、「報告書の活用について」という一節がある。この矢巾事案が起こる一年前にも岩手県内においては滝沢事案という重大事案が発生しており、その教訓を生かせなかったこと、活用できなかった学校に対する指摘も含めて次のように述べられている。

滝沢報告書は、個別事案を検証するものであるが、いじめの発生やその対応について数多くの知見をもたらす内容を含むものであり、工夫次第では汎用性の高いものとなる。また、その活用は教職員に「いじめが他人事ではない。」との意識付けを促すことにも有効である。

以上のことから、滝沢報告書に限らず、全国の検証委員会によって作成された多くの報告書並びに本報告書が今後いじめ、いじめによる自殺事件が発生しないように広く活用されることを求めるものである。特に、本報告書の提言部分が各名宛人の方々に周知されるよう努力することを求める。

重大事案についての報告書は事案の報告だけの「任」ではなく、次にどのように対応するか、どのように早期発見や予防に役立てるのか、ということにも活用すべきであることを矢巾事案の報告書は訴えていることを銘記したい。

### 3 小・中・高等学校時代の座席決めに関する研究

上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 山田智之

#### 1 問題

小・中・高等学校における席決めは学級内の諸活動の他、人間関係など様々な事柄に影響することが考えられる。学級の安定をもたらす場合もあれば、いじめなどの問題を助長させることもある。一般に、席の決め方は、くじ引きや話し合いなど様々な手法でおこなわれているが、その方法は学年団などの教員の組織や学級担任の裁量によるところが大きい。そこで、本研究では大学生・大学院生を対象に小・中・高等学校在籍時の席替えについて回想調査を行い、席決めについての検討を行った。

#### 2 方法

##### (1) 調査対象と調査方法

関東甲信越及び東海エリアの大学・大学院に在籍する大学生・大学院生250名を対象に2017年11月～12月の間にREAS（リアルタイム評価支援システム）を活用したWEBによる集合調査を行った。被調査者の多様性を確保するために、人文科学系統、社会科学系統、教育系統の学部を有する国立・私立大学4校で調査を実施した。調査を行った大学の入学試験の難易度別学校数は、上位校（SS $\geq$ 55）2校・中位校1校（SS $\geq$ 45）・下位校1校（SS $\leq$ 45）であった（晶文社学校案内編集部，2017）。有効回答のあったのは、143名（男子学生：85名，女子学生：58名）であり、概ね分析可能なサンプルの代表性が確保された（有効回答率57.2%）。

##### (2) 調査内容

小・中・高等学校時代の席決めの方法で「最も印象が良かった決め方」と「最も嫌だった決め方」を「くじ引き」「出席番号順」「先生が決める」「ご対面方式」「完全フリー」「その他」の中から選択させ、その理由を文書で回答させた。また、理想的な席決めの方法ないしは席決めの際に留意すべき事項について文書で回答させた。

#### 3 結果

「最も印象が良かった決め方」において、最も多いものが「くじ引き」であり全体の70%を占めていた（図1）。「くじ引き」の印象が良かった理由としては、「くじ引きは公平性があるから」「くじ引きは平等だから」といった公平感に通じるものが最も多く、「くじ引き」の印象が良かったと思っているもののうちの48%を占めていた。また、「ワクワクするから」「ドキドキして楽しかったから」といった期待感や高揚感を得るギャンブル的要素に関わるものが13%、「どんな結果でも、諦めが着く」「文句の言いようがない」が8%、「運だから」6%の順になっていた。

一方、「最も嫌だった決め方」では「先生が決める」が36%であり、つづいて「完全フリー」が25%、「出席番号順」が14%となっていた（図2）。「先生が決める」が嫌だった理由としては、「勝手に決められているという印象を受けるから」「先生に支配されてる感がある」といった自分で意思決定ができないといったものが最も多く、「先生が決める」を選んだもののうちの38%を占め、つづいて「先生の思惑がわかってしまうから」「先生の意図が働いていると思うとなんとなく嫌だった」といった教員の意図に関わるものが31%となっていた。また、「完全フリー」が嫌だった理由としては「完全フリーだと、はぶられてしまうことがあるため」「なかなかクラスに馴染めない人は悲しい思いをしてしまうことがあるため」「いじめがおきている際は悲惨」「浮いている子やいじめられていた子が最後まで一人でおり、あまりにも可哀そうであったため」「いじめにあっていたとき、うまく話に入らなかったから」「いじめがあったクラスだったため、完



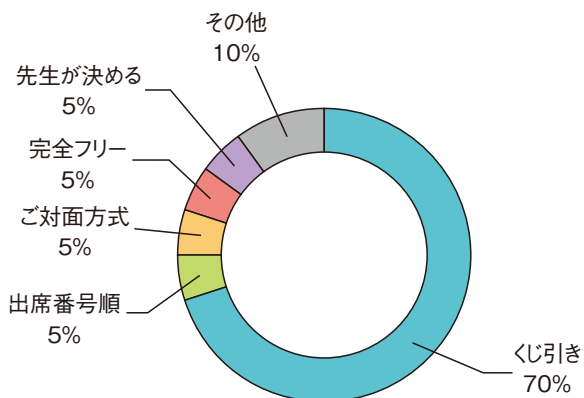


図1 良い印象の席決めの方法

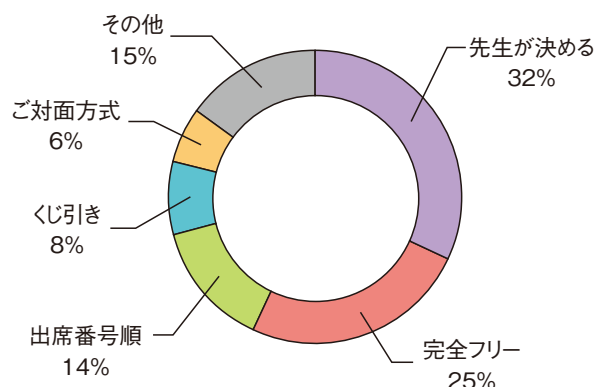


図2 嫌な印象の席決めの方法

全フリーは嫌でした」といったいじめに関わるものが「完全フリー」を選んだもののうちの37%を占め、つづいて「友人関係などに気を使うから」「友達がいないとつらい」「『ここに座ったら隣が〇〇だから、〇〇に嫌われるかな』とかネガティブな思考しか頭になかった」といった人間関係のネガティブな側面に関わるものが、29%を占めていた。また、「出席番号順」が嫌だった理由としては、「名字で席を決められるのは理不尽」「誰が前後になるか決まっているから」「自分で決めている感じがなくて不満に思ったから」といった意思決定ができないといったもの最も多く「出席番号順」を選んだもののうちの65%を占めていた。

#### 4 考察

本研究の結果、席決めの方法について、くじ等の方法で公平性が担保されることが求められていることが確認できた。また、完全にフリーとした場合は、いじめを助長したり、人間関係のネガティブな側面に対するストレスがかかるなど、難しい側面がある。一方で、教員が座席を決める場合、出席番号順など自らの意思決定ができないこと嫌う傾向もあり、小・中・高等学校時代で座席決めることの難しさが浮き彫りとなった。ある学生が「席決めのときに『あなたの居場所はここです。』といった正当な理由が担保されれば、いじめられても戦える。」と述べていた。学校はこの言葉の意味を十分に理解し、一人一人の児童・生徒が、公平性と自分の居場所を実感できる座席決めの在り方を工夫することが重要と考える。

#### 引用文献

晶文社学校案内編集部 (2017). 大学受験案内2018年度用 晶文社

## 4 保護者との信頼関係を構築するための「出前講座」の実施

上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 山田 智之

### 1 はじめに

いじめ問題の解決については、保護者が強く対応を求めてくることが多く、対応を誤ると深刻な事態を招くことがある。その原因として「いじめに対する教員の認識が不足」「不十分な実態把握」「保護者との対応力不足」「組織的な対応力不足」などがある。

上越教育大学では、地域の教育関係機関、市民団体及び企業等の求めに応じて、大学教員が出向いて講義等を行う「出前講座」を実施している。この講座は大学の教育と研究の成果を広く地域社会に還元するための地域貢献活動の一環として行われている事業で、平成29年度には77講座が開講された。講座のテーマは、学校での体験学習やキャリア教育の一環として、現職教員の方々の研修会として、また地域の方々の生涯学習の機会等として役立てていただけるよう、幅広いテーマものとなっている。2016年度より「保護者との信頼関係を構築するために」という90分の講座が加わり、今年も多くの教員研修において活用していただいた。当該の出前講座は、申込まいただいた方の要望に応じて、取り扱う事例等の工夫・改善を行い進めている。要望の中には、児童・生徒のいじめ問題に関係する保護者からのクレーム対応といったリクエストもあり、いじめ問題に対して学校現場が抱えている課題の一つが浮かび上がってきている。

参考：当該講座の案内文は次のようなものである。

\*\*\*\*\*

毎年、教員の200人に1人が精神的に疲れ果てる精神疾患で休業しています。様々な原因がありますが、主たる原因のひとつ、「保護者との関係」があります。近年、学校では「保護者対応が難しくなっている」と考える教員も多く、各教育委員会でも、保護者との関係構築のために、様々なマニュアルや手引書を作成し対応しています。

本講座は、保護者と信頼関係を構築し、円滑な学校運営が図れるよう、特に保護者からのクレーム対応時に焦点をあてて、その心構えと対応の仕方について、講義と演習を交えながら考えていきます。

\*\*\*\*\*

### 2 出前講座「保護者との信頼関係を構築するために」の内容

当該の出前講座の基本的内容は、つぎの(1)～(15)ようなものとなっており、申込まいただいた方の要望に応じて、アレンジを加えながら講座を進めている。基本的な展開はリスクマネジメントとクライシスマネジメントに分けて、具体的事例を交えながら進められ、保護者からのクレーム対応については、クライシスマネジメントに分類し、初期対応に焦点をあてながら、ロールプレイ等の手法を用いて進められる。

#### <基本的内容>

- (1) 学校におけるリスクマネジメント
- (2) クレーム対応はクライシス・マネジメント (図1)
- (3) 学校におけるリスクとは?
- (4) クレーム対策が必要な理由
- (5) クレーム対応の目標
- (6) 学校経営・教育力を低下させる対応

- (7) リスクマネジメントは意識的に
- (8) クレーム発生の原因
- (9) クレームはチャンスと考えられる余裕が必要
- (10) クレーム対応のプロセス
- (11) クレーム対応の姿勢
- (12) 聴き方のテクニック
- (13) クレーム対応時の重要なスキル
- (14) クレーム対応時の重要な心構え
- (15) ロールプレイ

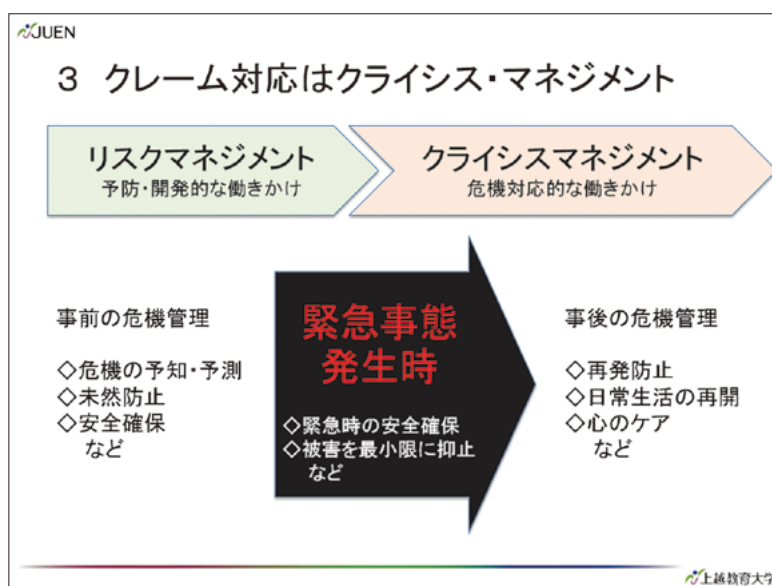


図1 クレーム対応はクライシス・マネジメント

### 3 今後の課題

保護者との信頼関係を構築するための「出前講座」は、前述の案内文からもわかるように、特にいじめ問題に特化したものではない。しかし、いじめ問題が発生した場合にも有効なものとして、受講していただいた諸先生方から評価を受けている。

しかしながら、いじめ問題の解決については初期対応を誤ると深刻な事態へと発展し、学校の機能そのものに深刻なダメージを及ぼすことが多いことから、いじめ問題に関係する保護者からのクレーム対応といったリクエストは増加することが予測される。このことから、これに対応したプログラムを早急に開発することが重要と考えられる。

## ○新潟市いじめ防止市民フォーラムに参加して

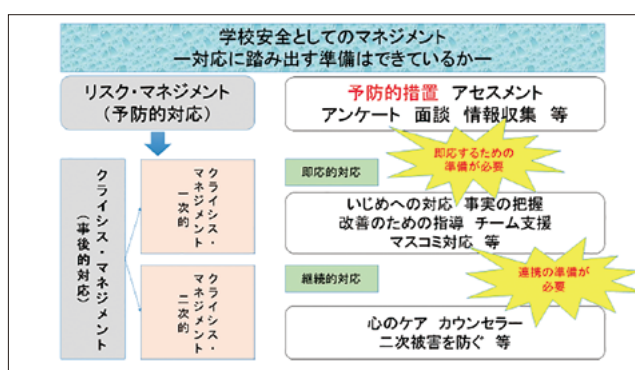
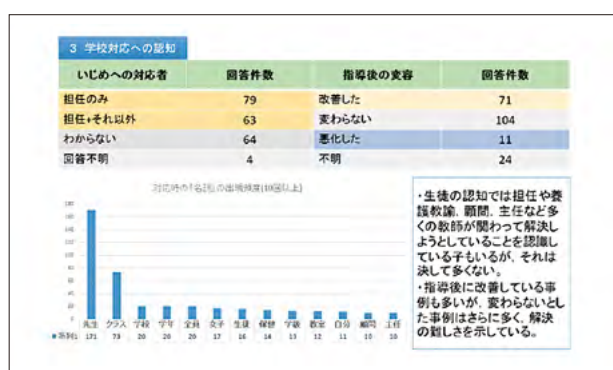
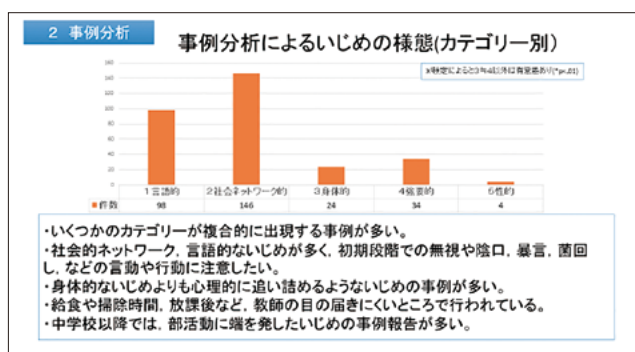
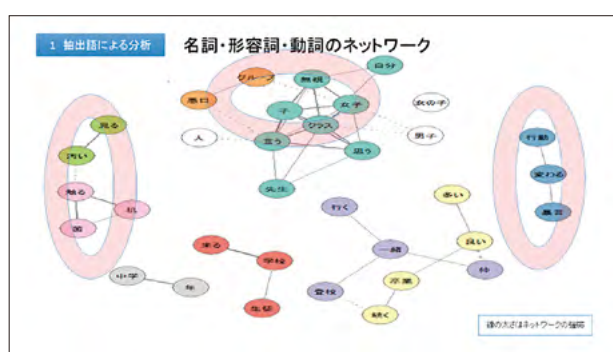
上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 高橋 知己

2017（平成29）年9月23日（土）、新潟市江南区文化会館にて「新潟市いじめ防止市民フォーラム」が開催された。当日は、新潟市いじめ防止市民連絡協議会が主催となり、約300人の一般市民、学校関係者が来場された。その中で「いじめの様態と学校対応を考える」というテーマで講演をさせていただいたので、その時の様子について概観してみたい。

講演の構成は、以下の通りである。

- 0：生徒ベースのいじめ実態調査
- 1：抽出語による分析
- 2：事例分析
- 3：学校対応への認知
- 4：リスクマネジメントとクライシスマネジメント

その後、休憩を挟んで会場の方々とともに、アクティブラーニング形式でいじめ防止に対する具体策を考える時間とした。



会場全体で行ったアクティブラーニングでは、いじめ防止という視点から、「いじめの発見につながる効果的なアンケートの方法」というテーマに取り組んでもらった。300人程度という多人数で、階段状の固定席という、あまりアクティブラーニングには適さないような環境であったが、皆さん積極的に活動に取り組んでいただいた。熱心な討議は時間が過ぎても続いているような感じであった。グループ討議の後に、全体の場で意見交流を行ったが、そこでも活発な意見が交わされた。

講演会後の感想でも、好意的な反応が多く、いじめ防止に関する市民や教育関係者の意識の高さと本気度

が伝わってくる講演会であった。今後とも、多くの人々とともにいじめ予防に対する啓発活動に取り組んでいきたい。

**新潟市 いじめ防止 市民フォーラム**  
いじめ防止支援プロジェクト（BPプロジェクト）

【日時】平成29年9月23日（土）  
午後1時30分～午後4時（開場：午後1時～）

【会場】新潟市江南区文化会館  
新潟市江南区茅野山3-1-14  
TEL. 025-383-1001

【主催】新潟市いじめ防止市民連絡協議会  
（事務局：新潟市教育委員会学校支援課）

【内容】  
**(1) いじめについて、みんなが知ろう！考えよう！**  
いじめの状況について（報告）～いじめの現状について～  
いじめの現状について報告し、いじめの現状について話し合います。

**(2) 講演及びディスカッション**  
講師：上越教育大学 准教授 高橋 知也  
議題：いじめの被害と学校対応を考える

お申込み・お問合せは～  
① 申込：① 申込の参加申込書とお振込用紙を記入の上、事務局までAXLしてください。  
② 電話にて、事務局までお申し込みください。  
③ 申込期間：平成29年9月22日（月）～平成29年9月22日（日）  
④ 申込先：事務局 事務局までお申し込みください。

事務局 新潟市教育委員会学校支援課（新潟市江南区）〒951-8505 1階1-9  
TEL. 025-220-3299 FAX. 025-230-0432 (FAXは2階)

平成29年度 深めよう 絆 県民の集い (上越地区)

**ストップ・ザ・いじめ!**  
本音と本気で

中学生・高校生の友達関係の悩みを聞き、大人たちは身近な相談者になれるのか。そして、どんな力になれるのか。ストップ・ザ・いじめに向け、本音で語り合い、本気で考えます。

平成29年10月1日(日) 会場 リージョンプラザ上越  
13:15～16:00

【参加対象】児童生徒、教職員、保護者、地域住民、「深めよう 絆」にいがた県民会議 構成団体・協賛企業等

【日程・内容】  
12:30～13:15 受付  
13:15～13:30 開会  
13:30～14:25 いじめに対する中・高生の本音トーク～思いを聞いて、力になって～  
14:25～14:40 休憩  
14:40～15:50 講演会 いじめと闘う心を育てる～講師 明治大学教授 鎌田 祥彦氏  
15:50～16:00 閉会

【問い合わせ】上越教育事務所学校支援第2課  
TEL. 025-526-9376

いじめ見逃しゼロ 県民運動

○平成29年度「深めよう 絆 県民の集い」（上越地区）

「ストップ・ザ・いじめ！ 本音と本気で」

コーディネータ 上越教育大学学校教育研究科 教授 稲垣 応顕

（ストップ・ザ・いじめ 本音トークの会場の様子）参加者約600人：主催者



## 第VI章 WEBページ紹介

本学公式HPの「BPプロジェクト」のバナーから、BPプロジェクトのトップページにリンクしています。



国立大学法人上越教育大学カリキュラム企画運営会議  
いじめ等予防対策支援プロジェクト実施専門部会

部会長	林 泰成	副学長
	安藤 知子	教 授〔学校教育専攻〕
	稲垣 応顕	教 授〔学校教育専攻〕
	早川 裕隆	教 授〔学校教育専攻〕
	高橋 知己	准教授〔学校教育専攻〕
	山田 智之	准教授〔学校教育専攻〕
	留目 宏美	准教授〔学校教育専攻〕
	清水 雅之	准教授〔学校教育実践研究センター〕

平成29年度上越教育大学いじめ等予防対策支援プロジェクト事業成果報告書

---

平成30年 3 月

発 行 国立大学法人上越教育大学カリキュラム企画運営会議  
いじめ等予防対策支援プロジェクト実施専門部会

---

